

寝てゐる男のところへ行つて、起こしにかゝつた……男は頭を持ち上げて、見ると、すぐにぱつと立ち上がった……「なに、なんの御用で？ 一體なにごとなんぞ？」彼は半ば寝ぼけたまゝで呟いた。

私はすぐには返事が出来なかつた。それ程までに、私は相手の風體に一驚を吃したのである。年の頃は五十そこ／＼、小さな薄黒い皺だらけの顔に、尖つた鼻をして、やつと見えるくらゐな蒼色の目をつけ、縮れた厚い眞つ黒の髪が茸の笠よろしく、小さな頭の上に大きく被さつてゐる侏儒——かういふ人間を想像してみたい。體ぜんたいは羸弱さうに瘦せてゐて、しかも眼ざしの竝みはづれて奇妙なことといつたら、それこそ言葉に傳へることが出来ないほどである。

「なに御用ですな？」と男はもう一度たづねた。私は事情をよく話した。彼はゆつくり／＼瞬きしながら、私から目を放さずにちつと聞いてゐた。

「かういふ譯なんだが、新らしい心棒を手に入れることは出来まいか？」と、最後に私はかう云つた。

「代は文句なしに拂ふがね。」

「お前さんは一體どういふお人なんで？ 獵でもなさる方かね？」彼は先づ、私の頭から足の爪先きまでじろりと見廻して、かう訊ねた。

「獵をやる者だ。」

「大方、罪のない空飛ぶ鳥を撃ちなさるんでせう？……森の獣だの？……神様のお造りなされた鳥を殺したり、罪もないものの血を流したりして、悪い事とは思ひなさりませんか？」

奇妙な爺さんは、やたらに言葉を引きながら口をきいた。その聲の響きも、やはり私を驚ろかした。老いぼれたところが少しもないばかりか、びつくりするほど氣持ちがよく、若々しく、殆ど女のやうに優しい聲音であつた。

「わしんとこにや心棒はごせえません。」暫らく黙つてゐた後、彼はかう云ひ添へた。「あんなのぢや役に立たんでせうし（彼は自分の馬車を指さした）、あんたのはきつと大きな車でせうからな。」

「この村で手に入るだらうか？」

「こんな所を村だなんて……こゝぢや誰も持つてゐる者はをりませんよ……第一、誰も家にある者がなくらゐで、みんな仕事に出て居りますでな。さあ、歸つて貰えませう。」と彼はだしぬけに云ひ切つて、また地べたへごろりと横になつた。

私はかういふ結末をまるで豫期してゐなかつたのである。

「ねえ、爺さん。」相手の肩に軽く手をかけながら、私は云ひ出した。「お願いだから、一肌ぬいでくれないか。」

「さつさつと行つて貰えませう！ 俺はくたびれてゐるんで。町へ行つて来たもんだから。」と、彼は云つて、百姓外套を頭から引つ被つた。

「まあさう云はないで、なんとかしてくれよ。」と私は言葉を續けた。「私は……私はお禮をするから。」

「お前さんに禮なんか貰ひたくないよ。」

「まあ後生だから、爺さん……」

彼は半ば身を起こして、細い足を組みながら坐り直した。



「なら、森の中の伐り出し場にでも連れて行くかな。あすこの森を、あきんどどもが買つて——天罰が恐ろしくねえか、森を伐り倒して、事務所なんか建てやがった、本當に天罰を恐れねえ奴等だ。お前さん、そこへ行つて誂へるなり、出来合ひを買ふなりしなすつたらいい。」

「結構だ！」と私は嬉しさに叫んだ。「結構！……さあ行かう。」

「櫛の木の心棒のいゝやつをなあ。」と彼は起き上がりもせず、また言葉を續ける。

「その伐り出し場までは遠いかね？」

「三露里だ。」

「いや、仕方がない！ お前の馬車に乗つて行けるわけだらう！」

「うん、でも……」

「さあ、出かけよう。」と私は云つた。「出かけよう、爺さん！ 馱者が、往來で待つてゐるんだから。」

老人は澁々立ち上がつて、私の後について往來に出た。馱者は苛々した氣分になつてゐた。馬に水を飲ませようとしたところが、井戸の水がおそろしく少くて、味がよくなかつたのである。馱者連に云はせれば、水が何より一番大切な事なのである……けれども、老人の姿を見ると、馱者はにやりと齒をむき、頷きながら叫んだ。

「やあ、カシヤーヌシカ！ 今日（こんにち）は——」

「今日は、正直者のエロフェイ！」とカシヤンは精のない聲で答へた。

私は早速、老人の申し出を馱者に傳へた。エロフェイはそれに賛成して、背戸へ馬車を乗り入れた。馱者が手順を考へながら、まめ／＼しく馬を車から外してゐる間、老人は門に凭れかゝつ

て、浮かぬ様子で馱者と私を見比べてゐた。彼はなんだか腑に落ちない様子で、見受けたところ、私たちが不意に押しかけたのを餘り嬉しく思つてゐないらしかつた。

「一體、お前も居場所を變へられたのかい？」とエロフェイは、鞭を外しながら、出しぬけに訊ねた。

「さうよ。」

「へえ！」と馱者は齒の間から押し出すやうに云つた。「ときに、大工のマルティンが……おめえはリヤバヤ村のマルティンを知つてゐるだらう？」

「知つてるよ。」

「ところで、あいつが死んだんだぜ。俺あ今あれの棺に出會はしたんだ。」カシヤンはぴくりと身を慄はした。

「死んだつて？」と彼は云つて、目を伏せた。

「あゝ、死んだんだ。何だつておめえ、ちやんと癒してやらなかつたんだい、え？ だつて、お前は病氣の療治をするつて話ぢやないか、醫者さんださうぢやないか？」

馱者は明らかに老人をからかつて、面白がつてゐるのである。

「ところで、これがお前の車なのかい？」と肩を曲げて、車の方をさしながら、彼はかう云ひ足した。

「あゝ俺のよ。」

「ふん、車か……これが車か！」と彼は繰り返し、轆を掴むと、殆ど車を引くり返さないばかりにした……「これが車かい！……だが一體なにに曳かして伐り出し場まで行くつもりだ……」



この轅にや、うちの馬は駕けられやしないぜ。うちの馬はでつかいんだからな、ところが、この轅はなんの態だ？」

「分かんねえな、」とカシヤンは答へた。「何に曳かして行きなざるかね。まあ、ほれ、あの畜生にでも曳かせなけりや仕方がねえだらう。」と、彼は溜め息と共に附け足した。

「こいつに？」とエロフェイは引き取った。そして、カシヤンのやくぎ馬の傍へ寄つて、さも馬鹿にしたやうに中指で馬の頸を突いた。「ちえつ、」と彼は、たしなめるやうに云ひ足した。「寝てやがら、間抜け野郎め！」

私はエロフェイに早く馬車の用意を頼んだ。私は自分でカシヤンと一緒に伐り出し場へ行つて見たくなつたのである。そんな所にはよく松マツ 鶏トリがあるものだ。もうすつかり馬車の用意が出来た、私が犬をつれて、どうにかかうにか、板の反り返つた車の底に尻を落ちつけ、カシヤンがすつかり一と縮みになつて、相變はらぐ浮かぬ顔つきで、同じく前の横木に腰を下ろした時——エロフェイが私の傍へやつて来て、さも祕密めかしい様子で囁いた。

「とにかく旦那さま、御一緒にお出かけになつてよろしうございました。でも、あいつは何分その神がよりみたいな奴でしてな、綽名を『蚤』つて申しますんで。どうして旦那に、あいつの云ふことがお分かりになつたか、それが不思議なくらゐで……」

私はエロフェイに向かつて、今までのところ、カシヤンは中々分別のしつかりした男のやうに思はれると云はうとしたが、馭者はまた同じ調子で言葉を續けた。

「でも、お氣をおつけなさいまし、あいつ、ちやんと間違ひなく御案内しますかどうかね。それに心棒も御自分でお選りになるがよろしうございます。なるべく頑丈さうなのをお取んなさいま

し……ときにどうだね。蚤公。」と彼は聲を大きくして附け足した。「どうだね、お前んとこで麵麴メンコきれにでもありつけないかね？」

「搜してみるが……めつかるかも知れねえ。」とカシヤンは答へて、手綱を一つしやくつた。かうして私たちは乗り出して行つた。

私の心から吃驚したことだけれど、カシヤンの馬はなか／＼よく走つた。彼は道々ずつと頑固に沈黙を守つて、私がちよい／＼問ひかけても、ぶつきら棒な調子で、澁々返事をするばかりであつた。やがて間もなく伐り出し場へ乗りつけ、それからやつとこさで事務所まで辿り着いた。

それは、急場の間に合はせに土堤をめぐらして池の形にしてある小さな谷の上に、ぼつんと一軒だけ建つてゐる高い小屋なので。この事務所の中には、齒が雪のやうに白く、甘つたるい眼付きで、甘つたるい臆面のない口の利き方をして、おまけに甘つたるい狡るさうなお世辭笑ひを振り撒く若い手代が二人控へてゐた。私はこれを相手に心棒の値段を決めて、伐り出し場の方へ足を向けた。カシヤンが馬の傍に付き添つてゐて、私の歸りを待つてゐる事と思つたが、圖らずも彼は私の傍へやつて来た。

「なんですかね、やはり、罪のない鳥どもを、撃ちに行かつしやりますかね？」と、彼は云ひ出した。「え？」

「さうだよ、もし見つかつたら。」

「わつしも一緒について行くかな……構はないかね？」

「構はないとも、構はないとも。」

そこで、私たちは一緒に出かけた。——木を伐り拂つた場所は、全部で一露里エルスキーばかりである。



正直なところを云ふと、私は自分の犬よりも、カシヤンの方に餘計眼をつけてゐた。これが蚤といふ綽名をつけられたのも、なるほど無理からぬ事と思はれた。何アつ冠つてゐない小さな黒い頭が（もつとも、その髪の毛はどんな帽子の代はりにもなるくらゐであつた）、目まぐるしいほど藪や灌木の間をちら／＼しつゞけた。彼は驚くばかり足が早くて、いつもひよい／＼跳び上がるやうな歩き方をした。のべつ屈み込んで何かの草を摘み取り、それを懐へ入れてゐる。そして、何やら口の中でぶつ／＼云ひながら、如何にも試験するやうな物好きな眼付きで、絶えず私と犬をじろ／＼眺めるのであつた。低い灌木の中や、『下草もの』の間や、伐り出し場などには、小さな灰色をした鳥がゐて、ひつきりなしに木から木へ飛び移り、飛び移りさまにふいと潜るやうな恰好をしながら、ちいちく啼き立てゝゐる。カシヤンはその聲を真似て、小鳥どもと啼き交はすのであつた。若い鶉が一羽ちつ／＼と鳴きながら、すぐ彼の足もとから飛び立つた。——彼もそれに續けて、ちつちつ鳴き真似をする。雲雀が羽をこまかく慄はせて、朗かな歌聲を張り上げながら、彼の頭の上へ下りかけると、——カシヤンはまたその歌を引き取るのであつた。私にはまるで話しかけようともしない……

天氣は上々で、前よりもつといゝくらゐであつたが、暑さは一向に凌ぎよくはならなかつた。晴れ渡つた空には、消え残つた春の雪のやうに黄味を帯びた白雲が、下ろされた帆にその儘の平たい楕圓形をして、ところ／＼に高く浮かび、漸くそれと知られるくらゐに流れ動いてゐる。綿のやうにむく／＼と軽やかに様々な面白い形を描き出してゐる雲の縁は、ごく緩やかではあるけれど、眼に見えて刻一刻と變はつて行つた。これらの雲は靜かに溶けて行つて、地上に影を落とさない。私はカシヤンと二人で長いあひだ、伐り出し場を彷徨ひ歩いた。まだ三尺と伸びないひ

こぼえが、ほつそりした滑らかな莖を連ねて、勤ずんだ低い切り株を取り巻いてゐる。鼠色の縁をした丸つこい海綿苔が——これを煮て火口にする——これらの切り株にびつしりくつ／＼いてゐる。野苺が薔薇色をした蔓を、その上に這はしてゐるし、すぐ傍には、茸が一家眷族ひと塊りになつて、窮屈さうに竝らんでゐる。足は焼けるやうな日光を思ふ存分吸ひ込んだ長い草に絡まりもつれる。どこを見ても、どぎつい金屬性の光りを放つ赤味がかつた木の葉のために、眼がちらちらするやうな思ひであつた。どちらを向いても、野豌豆の空色をした房や、金の盃に似た琉金花の可愛い花や、半ば紫で半ば黄色い三色茸が、友禪模様を擡げてゐる。ところ／＼赤く萎けた草のすぢで轍の跡をとめてゐる荒れ果てた小徑のほとりに、風雨に勤ずんだ薪が幾（七尺）も高く積み上げられてゐる、その歪んだ四角形が弱々しい影を投げてゐるばかり——他にはどこにも物の影らしいものもなかつた。軽いそよ風が目を覺ましては、また消えてしまふ。不意にまとも顔に當たつて、嬉々として戯れると——あらゆる物が愉し氣にさんざめき、頷き始める。あたりが一面にざわ／＼と動き出して、しなやかな羊齒の葉先がなよ／＼と揺れる——すると、自おつから心が愉しむ……けれど、さう思ふ間もなく又ばつたり風が落ちて、何も彼もがもとの靜寂にかへる。たゞ蟻がまるで面當てのやうに、聲を揃へて鳴きたてる。——この絶え間ない、酸っぱいやうな、乾き切つた響きは、頭の芯を痺れさせるやうである。それは眞晝どきの執拗な暑さにふさはしい。それはかうした暑さから生まれ、赤熱した大地の中から呼び出されたもののやうである。

たゞの雛一羽にも行き當たらないうで、私たちはたうとう新らしい伐り出し場まで来てしまつた。そこには近ごろ伐り倒されたばかりの泥揚が、草や小さな木を押しつけながら、侘びしげに



地面に長々と投げ出されてゐた。中には、まだ青みを帯びてゐるけれど水気の切れた葉を、ちつと動かない枝から垂れてゐるものもあるし、また中には、葉がすっかり枯れて、干反つてゐるものもある。鮮やかな水々しい色をした切り株の周りには、爽やかな金色がかつた白い木つばが堆高く積つて、なんとも云へないほど氣持ちのいい、一種特別な苦味を帯びた香りを放散してゐる。はるか彼方の林に近いあたりでは、斧の音が鈍く響いて、時をり捲き毛の頭のやうに水々した梢が、宛ら両手を擴げて禮拜でもするやうに、嚴かに静々と倒れて行く。

永い間、私はなんにも獲物が見つからなかつた。そのうちに到頭、苦蓬の一面に生え擴がつてゐるこんもりした若櫛の木立ちの中から、一羽のくひなが飛び出した。私は火蓋を切つた。水鶏は空中にもんどり打つて落ちて來た。鐵砲の音を聞きつけたカシヤンは、いきなり片手で眼を蔽つて、私が銃に装填をし直し、水鶏を拾ひ上げるまで、身じろぎもしなかつた。私がまた先きへ歩き出すと、彼は撃たれた鳥の落ちた所へ行つて、いくらか血のしづくの散つてゐる草に身を屈め、頭をふつて、おづ／＼と私の方を見やつた……それから暫らくたつて『罪だな……あゝ、これこそ本當に罪なことだ！』と、呟く聲が私の耳に入つた。

たうとう暑さに辟易して、私たちは森に入つた。私は胡桃の高い繁みの蔭に飛びこんだ。その繁みの上には、すらりとした若楓が軽やかな枝を美しく擴げてゐる。カシヤンは伐り倒された白樺の根がたに腰をおろした。私はその様子をちつと眺めてゐた。梢で木の葉が微かに揺れて、その淡い緑色の影が、黒つぽい百姓外套につままれた彼のひよわさうな身體や、小さな顔の上を、靜かにあちこち滑つてゐる。彼は頭を上げようとしな。相手が黙り込んでゐるのに辛氣くさくなつて、私は仰向きに引つくり返り、はるかに明るく擴がつた空を背景に、縫れ合つてゐる木の

葉の和やかな戯れに見惚れ始めた。森の中で仰向けに寝そべりながら、空を眺めるのは素晴らしく愉快なものである！ それはまるで底知れぬ海の中を覗いてゐるやゝな氣持ち、海は廣々と足下に擴がつてゐるやうである。樹木は大地から上へ聳えてゐるのではなく、宛ら巨大な植物の根に似て、玻璃のやうに澄み切つた波の中へ垂直にたれてゐるやうに感じられ、木の葉はエメラルドかとはかり透いて見えると思へば、その緑が金色を帯びて、殆ど黝ずんで見えるほど濃くなつて行く。どこか遠くの方に細い小枝が突き出てゐて、その先き一枚の葉が、透き通るやうな碧瑠璃の空の一片に、そよともせずに浮き出してゐる。その傍にもう一枚の葉が、魚の鰭の戯れを思はせながらゆらいでゐる。その動きは風のためではなくて、おのづから動いてゐるとしか思はれない。まる／＼とした白雲が水の底なる魔法の島のやうに、靜かに浮かんで來ては、靜かに流れ去る——と思ふ間に、この海も、この輝かしい空氣も、太陽の光りを浴びたこれらの枝も葉も、なにもかも、不意に波立ちはじめ、慌ただしい光りを帯びて慄へ出す。すると、さながら俄かに寄せて來た波のうねりの果てしないざわめきに似て、爽やかな打ち慄へる囁きが起る。身動きもせず眺めてゐると、心がどんなに喜ばしく、和やかにたのしくなつて來るか、とても言葉では云はずくせない。ちつと眺めてゐると、澄み切つた空の碧が、その色と同じやうに無心な微笑を唇に誘ふ。空ゆく雲と同じやうに、また雲の動きにつれられるやうに、一連の幸福な思ひ出が、靜かに心の中をよぎる。そして、瞳は次第に遠く遠く去つて行つて、あの安らかな輝かしい深淵の中へ人を誘ひ入れ、その高い空から、その深い淵から、離れることが出來ないやうに思はれる……

「旦那、もし、旦那！」不意にカシヤンが例のよく響く聲で呼びかけた。私ははつとして身を起こした。今まで私が問ひかけてもろく／＼返事しなかつた者が、今度は



急に自分の方から話しかけるではないか。

「何の用だね？」と私は訊ねた。

「ねえ、なんだつてお前さん、鳥なんか殺しなすつた？」ひたと私の顔を見つめながら、彼はかう云ひ出した。

「なんのためつて？……くひなは獵の獲物で、食べられる鳥ぢやないか。」

「そんな事のために殺しなすつたのぢやねえでせう、旦那。お前さんがなんであんなもの食ひなさるもんかね！ たゞ娛しみに殺しなすつたんでがせう。」

「でも、お前だつて多分、早い話が、鶯鳥なり鶏なり食ふだらう？」

「そんなのは、神様が人間に決めて下すつた鳥だけれど、くひなは森で自由に飛び廻つてる鳥だもんね。何も水鶏に限つた事ぢやない。まだほかにも、森の中だの、野つ原だの、川だの、沼だの、草つ原だの、高い所だの、低い所だのにある奴が幾らでもある……それを殺すなあ罪なこつた。壽命のあるうちは、勝手にこの世で生かしくがい……人間にやちやんとほかに食ひ物が決まつてる。人間の食ひ物や飲み物は別にありますよ。穀類など神様のお授けものだし、天から降る水もあれば、大昔の先祖たちから傳はつて來てる飼ひならした獣もあるしな。」

私は吃驚してカシヤンをみつめた。彼の言葉はすらくと淀みなく流れ出した。別に言葉を探すやうな事もなく、とき／＼眼を瞑ぎながら、靜かな感興と、憤ましやかな威嚴を帯びた調子で話すのであつた。

「それぢや、お前に云はせれば、魚を殺すのも罪なんだね？」と私は問ひ返した。

「魚は冷たい血をしてまきあ。」と彼は如何にも確信ありげに云ひ返した。「魚は鳴かない生きもん

だからね。怖かない事も、嬉しい事も知らねえ。魚は口も利かなけりや、感じもねえ生き物で、身體中の血だつて生きぢやあませんや……血つてものは、彼は暫らく口を噤んでから、また言葉續けた。「血は聖いもんだ！ 血は日の目を拜むことがねえ。血は明るみから隠れるやうに隠れるやうにしてゐるだ……血を明るみへ出すのはでつかい罪だ。それこそでつかい罪だ。恐ろしいこつた……ああ、だいそれたこつた！」

彼は溜め息をついて目を伏せた。正直に云ふと、私はすっかり度膽を抜かれて、この奇態な老人をみつめた。彼の云ふことには、百姓の言葉らしい響きが感じられなかつた。たゞの百姓にこんな話し方は出来ないし、村によくある口達者な連中の話し方ともちがふ。それは充分に考へ抜いた、莊重な話しぶりだ、しかも風變はりである……こんな話しぶりは、今までに聞いた事がない。

「カシヤン、一つ聞きたい事がある。」いくらか赤味を帯びて來た相手の顔から眼を離さないで、私はかう口を切つた。「お前は何を商賣にしてゐるね？」

彼は直ぐには私の問ひに答へなかつた。その眼は、ちよつと東の間、不安げにきよ／＼と動いた。

「たゞ神様のお云ひつけ通り暮らしとりますよ。」と、彼は漸く口をきいた。「べつに商賣なんて——どうして、なんにも商賣なんかしぢやあねえんで。餓鬼の時から、とても鈍なたちでね、かうして働ける間だけ働いぢやあるけれど——その働きもろく／＼出來やしねえ……どうして、そんな事が！ 何せ達者な方でもなし、手も不器用でね。えゝと、春になると、鶯を捕つてをりますがな。」



「鶯をとるつて？……でもお前は、森や野つ原や、その他いろんな所に棲んでゐる生き物に觸つちや不可ないと、さう云つたぢやないか？」

「そりや殺すのはいけねえ、そりやその通りだ。さうでなくつても、生きてゐるのはみんな死ぬんだからね。早い話が、あの大工のマルティンだ。大工のマルティンはこの世に生きぢやあたけれど長生きもしねえで死んでつた。それで女房は今、亭主のことを思ひ出したり、小せえ餓鬼どもものことを考へて、泣きの涙でゐるが……死神といふ奴ばかりは、人間にしても、畜生にしても、誤魔化すわけにやゆかねえ。死神はべつに駆けて來もしねえけど、こつちも逃げるわけにやゆかねえ。だから死神に手を借すな要らざるこつた……俺あ鶯を殺しなんかしねえ——飛んでもねえ話だあ！ 俺苛めたり、生命とつたりするために、鶯を捕まへるんぢやなくつて、人を喜ばすために捕るんだ、慰めたり、楽しませたりするためによ。」

「お前はクルスクの方へ捕りに行くかね？」

「クルスクの方へも行くし、何かの拍子にやもつと遠くへも出掛けまさあ。沼地で夜を明かす事もあれば、森の奥の寂しい原つばで、たつた一人寝ることもあるよ。そんな所ぢや鶯が啼いたり、兎が可愛い聲を立てたり、鴨がぎやあ／＼云つたり……俺あ晩に鶯の居所を見ておいてさ、夜明けに鳴き聲で見當をつけてから、東が白む頃に藪の上に網を張るんだ……鶯の中でも、本當に哀れつばい聲で啼くのがあまさあ……いゝ聲で啼いて……可哀さうなくらゐだ。」

「で、それを賣るのかね？」

「親切な人に譲つてやりまさあ。」

「それから、まだほかに何をしてゐるね？」

「何をしてゐるつて？」

「何か仕事をしてゐるかといふのさ？」

老人はやゝ暫らく黙つてゐた。

「別にこれといつて仕事はしてゐねえ……俺あ、仕事は下手な方でね。でも、読み書きは出来るんで。」

「お前、読み書きが出来るつて？」

「読み書きは出来るんですが。神様とそれから親切な人たちのおかげでね。」

「どうだね、お前、女房子はあるのかい？」

「いんや、ありません。」

「そりやどういふわけだ？……死に絶えたとしても云ふのかね？」

「いんや、ひとりでにさうなつたんで、廻り合はせが悪かつたんですが。それに、そんな事はみんな神様の思召し次第で、人間だれしも神様の御意のまゝに生きてゆくものがすよ。でも、人間は正直でなくちやならねえ——これが一番だ！ つまり、神様のお心に叶ふやうにしなけりや。」

「お前には身内もないのかね？」

「あります……が……別にこれといふ……」

老人は言葉につまつた。

「ときに、どうだね。」と私は口を切つた。「さつきうちの馭者がお前を掴まへて、何故マルティンを癒してやらなかつたかと訊いてゐたやうだが、お前は一體病氣が癒せるのかい？」



「お前さんの馭者はまつとうな人間だ。」とカシヤンは考へ深さうに答へた。「けれど、それでも悪い癖があるよ。俺のことを醫者さん、醫者さんと云つて揶揄ふが……俺が醫者だなんて飛んでもねえ……誰だつて病氣なんか癒せるものぢやねえや。そんな事はみんな神様の御心にあるでな。でも……病氣に効目のある草や花があるにやある。そりや本當にあるよ。ほら、例へば狼把草たうじくさなんかも、人間にとつちや有難い草だ。それからおほぼこなんでも同じこつて、こんな草の話をするなあ恥ぢにならねえ。神様から授かつた、あらたかな草だからな。ところが、そのほかのやつは、どつこい、さうはゆかねえ。効くにや効くけれど、不淨な草だ。そんなやつのお話をするのも罪になるくらゐだ。でも、お祈りを唱へながら使へば、まあ……そりや、もう、淨めの言葉があるからな……とかにく、信仰を持つてる者は、助かりますで。」と彼は聲を低めて云ひ添へた。

「お前はマルティンに、これつて薬をやらなかつたのかい？」と私は訊ねた。

「聞いたのがもう遅かつたもんで。」と、老人は答へた。「いや、そんなことを云つたつて始まらねえ……みんなそれ／＼持つて生まれた約束事だからな。大工のマルティンは壽命がなかつたんでさ。この世の壽命がなかつたわけで、そりやもう仕方ねえこつてがすよ。いや、全くこの世の壽命のない人間は、お天道さまでも、他のものみてゑに暖めちや下さらねえし、麵麩めんこだつて身につかねえ……まるで、かう、何かに招まねばれてるやうなもんでがすよ……まあ、神様のお慈悲で、あれの魂の鎮しづまりますやうに！」

「お前はつと前からこちらへ引つ越しさせられたのかね？」と、暫らく黙つてゐた後で、私はから訊ねた。

カシヤンは、ぴくつと身を慄おそはした。

「いんや、つい近頃で、四年ばかりの前の事です。大旦那の時にや、みんな昔ながらの所に暮

らしてゐたもんだが、後見人が世話を見るやうになつてから、村を追ひ出されてしまつたので。

大旦那は温順しい靜かな方だつたがなあ——今ぢや天國に眠つておいでになる！ でも、後見人だつて、理窟りくつに叶つた裁きをつけたに相違ねえから、もうかうなるべき因縁いんごんだつたと見えませあ。」

「以前、お前たちは何處にゐたんだね？」

「クラシーワヤ・メーチから越してめえりましたんで。」

「それはこゝから遠いのかい？」

「百露里ひやくろばかりのところでがす。」

「どうだね、向かうの方がよかつたらうか？」

「そりやよかつた……よかつたどころぢやねえ。あつちは、廣々とした川沿ひの土地で、ほんたうにわし等の巢ねになつてゐたもんだが、こゝは窮屈きうくつで、かさ／＼に乾いて……こゝへ來てから、わし等は孤兒こごになつたやうな氣がするくらゐだ。古巢ふるねのクラシーワヤ・メーチにゐた頃は、ちよつと丘へでも登つてみりや——それこそもう、なんとも云はれねえ！ ねえ……河もありや、草つ原もあるし、森もある。こつちの方に教會堂があるかと思へば、またその先きにや草つ原が續いてゐる。遠い遠いとこまで見渡せる。ほんたうに、うんと遠いとこまで一目だ……いくら眺めても、眺めても、全く飽きる事がねえ、ほんたうによ！ とこが、こゝは土地は確かに向うより上等だ。粘り氣があつて、百姓どもの云ふ上等のねばつちで、俺の作物だつてどこでも、しこたま獲れるよ。」



「なにかね、爺さん、正直な話が、お前も生まれ故郷に行つてみたいだらうね？」  
 「そりや、一目見てえもんでがすよ。尤も、どこにゐたつて結構でさ。俺あ女房子のない人間だから、一つところに落ちつかれねえ性分なんで。それにお前さん！ ながく家にばかり燻ぶつて居れるもんですかい？ ところがね、こんな風にどん／＼歩いて行くと……」彼は聲を高めて言葉が続けた。「氣が軽々として来る、本當でさ。お天道さまも照らして下さるし、神様のお目にも届きよくなつて、歌もひとりでに調子がよくなつて来る。その邊を見ると、綺麗な草が生えてる。そこで、眼に入つたのをちぎつて取る。またこつちには、ものの例へが、泉の清水が流れてる、有難い聖水だ。そこでこれにも眼をつけて、腹いっぱい飲む。空には鳥どもが歌つてる……話はちがふが、クルスクの向かうにや草原が続いてゐますぜ。廣びろとした大きな野原だが、あれこそたまげたもんだ。あれこそ見るからに、氣持ちのいゝ廣びろとしたところで、本當に神様のお授けもんだ！ その野原は、人の話だと、暖い海のすぐ傍まで續いてて、そこにや綺麗な聲をしたガマユン鳥がゐて、冬でも秋でも木の葉の落ちることがねえし、金色の林檎が銀の枝になつて、人間は誰でも何不自由なく、まつとうな暮らしをしてるちゆう話だ……さういふとこに俺も行つてみてえもんだ……なんせ、俺あずるぶん所々方々歩いたもんでさ！ ロムヌイにも行つたし、花の都のシンビリスクにも、金の圓屋根で埋まつてゐるモスクワへも行つたし、多くの人を養ふオカ河へも、可愛らしいツナ河へも、河の母と云はれるヴォルガへも行つて、多くの人を養ふ切な基督信者達も見れば、立派な町々にも暮らして來た……あゝ、もう一度あゝいふ所へ行つてみたい……それこそ……本當にもう……かう思ふのは、罪の深い俺一人だけぢやねえ、他にも多くの信者達が木の皮鞋を穿いて出かけて、世の中を歩き廻りながら、眞を探してゐるからな……

……さうだとも……だつて、うちにぢつとして何になるかね、え？ 人間にや正直ちゆうものがねえんだ——これがいけねえこつた……」

この最後の言葉を、カシヤンは殆ど聞きとれないくらゐ早口に云つた。それからまた何か云つたけれど、私にはまるで聞きとれなかつた。彼の顔はなんとも云へない奇妙な表情を帯びて來たので私はゆくりなく『神が、り』と云つた言葉を思ひ出した。彼は目を伏せて、咳拂ひを一つすると我に返つたやうな風であつた。

「このお天道さまはどうだ！」と彼は小聲に云つた。「やれ、やれ、なんちふ有難いお恵みだ！ いやもう森の中の暖けえこと！」

彼は兩肩を動かして、暫らく黙つたまゝで、ぼんやりと目を据ゑながら、低い聲で歌ひ出した。長く節を引いてゐる歌の文句は、完全に聞きとれなかつたけれど、これだけのことは私の耳に入つた。

わしの名前はもと／＼カシヤン

縛名を蚤と云ひます……

『へえ！』と私は考へた。『こいつはおまけに自作だわい……』すると、彼はきつと森の繁みの中を見透かしながら、身慄ひをして歌ひやめた。私は振り返つて見ると、青い袖無上衣を着て格子縞の切れで頭を縛り、日にやけたむき出しの手に編み籠を持つた、年の頃八つばかりの、小さな百姓娘が立つてゐた。娘は私達に出會はうとは夢にも思ひ設けなかつたらしい。謂はば不意に私



たちによつつかつたのであらう。緑の胡桃の茂みが深い蔭を落としてゐる草地にちつと立つて、黒い瞳でおづ／＼と私を見てゐるのであつた。こつちでその姿を見分ける暇もなく、娘は樹の後ろにかくれてしまつた。

「アンヌシカ！ アンヌシカ！ こつちへ來な、怖かながることあねえ。」と老人は優しく聲をかけた。

「おつかねえよ。」といふ細い聲が聞こえた。

「怖かなかねえ、俺のとこへ來な。」

アンヌシカは無言のまま、隠れがから出て、靜かにぐるつと大廻りして——その子供らしい足が深い草の中で微かな音を立てる——老人のすぐ傍の茂みから姿を現はした。背が小さいので、初めは八つぐらゐに見えたけれど、本當は十三か十四ぐらゐの娘であつた。身體全體は小つちやくて瘦せてゐたけれど、よく整つて、はしつこさうであつた。美しい小さな顔は、驚くばかりカシヤンに似てゐた。尤も、カシヤンは大していゝ男つぶりでもなかつたけれど。同じやうに鋭い顔立ち、同じ様に奇妙な眼付き、狡るさうであつて正直で、もの思はしげな、人の腹を見すかすやうな眼付き、それに身のこなしまでそつくりであつた……カシヤンは娘をちらり見やつた。娘は横むきに佇んでゐた。

「どうだ、茸とつてゐたのか？」と彼は訊ねた。

「あゝ、茸を。」と娘は、臆病げな微笑みを浮かべながら答へた。

「たくさん見つかつたかい？」

「あゝ、たくさん。」（娘はすばしく老人をちらと見て、又につこり笑つた。）

「白茸もあるかい？」

「白茸もあるよ。」

「どれ、見せな、見せな……（娘は籠を腕から外して、茸にかぶせてあつた大きな牛蒡の葉を半分がた持ち上げて見せた。）ほう！」とカシヤンは籠の上に屈み込んで云つた。「こりや素晴らしい奴だ！ えらいぞ、アンヌシカ！」

「カシヤン、これはお前の娘なのかい？」と私は訊ねた。（アンヌシカの顔はぼつと赧らんだ。）

「なに、ほんのちよつとした身内でき。」とカシヤンはわざとらしく、事もなげに云つた。「さあ、アンヌシカ、歸るがい。」と直ぐに又かう云ひ足した。「さつさと歸るがい。でも、氣をつけてな……」

「おい、何故歩かして歸すんだ？」と私は遮つた。「乗せてやつたらいゝぢやないか……」

アンヌシカは罌粟の花のやうに眞つ赤になつて、兩手で籠の紐を握み、心配さうに老人の顔を見た。

「なあに、無事にけえりますよ。」とカシヤンは相變はず掛け構ひのない大儀さうな聲で答へた。

「何もさう心配してやる事あねえ……一人だつて歸れまさあ……さあ行きな。」

アンヌシカはすばしく森の中へ姿を隠した。カシヤンはその後を見送つてゐたが、やがて目を伏せて、にやりと笑つた。このゆつくりした微笑みにも、アンナに云つた僅かばかりの言葉にも、この娘に話しかけた時の聲の響きにも、言葉に盡くせない強い情合ひと、優しみが籠もつてゐた。彼はまた娘の行つた方を眺めて、もう一度ほゝ笑んだ。そして顔を撫でながら、何度もひ



とりで頷いてゐた。

「なんだつて、あんなに早く歸したんだ？」と私は訊ねた。「茸でも買つてやつたものを……」

「まあ、そんなものは、あなた、お氣が向いたら、うちへ歸つた時にでも買へますよ。」初めて『あなた』といふ言葉を遣ひながら、彼はかう答へた。

「あの子はなか／＼縹緞よしだね。」

「いんや……そんなことが……たゞちよつと……」と何やら氣の進まぬ様子で答へると、それなり前と同じやうな無口になつてしまつた。

もう一度この男の口を解いてみよう、色々手を盡くしてみなければ、一向に甲斐がないのを見て、私は伐り出し場の方へ出かけた。それに暑さも幾らか凌ぎよくなつた。けれど、私のまの悪さ、俗にこの邊で云ふ『さんりんぼう』は何時までも續いて、結局、水鶏くひな一羽と新しい心棒だけを獲物にして、出村へ引つ返した。もう背戸の傍まで來た時、だしぬけにカシヤンが私の方を振りかへつた。

「旦那、もし旦那。」と聲をかけた。「實あ、申し譯のない事をしましたよ。ありやわつしが獲物をみんな逃がしたんで。」

「と云ふと？」

「そりや、ちやんとまじなひを知つてゐますあ。だもんだから、お前さんの犬はよく仕込んだい犬だけんど、どうする事も出来なかつたんで。まあ考へてみると、人間なんてつまらねえもんだ。人間なんて、ね？　だが獸だつて、人間が駄目にしてしまつたぢやねえか？」

私はカシヤンに、野の鳥を『まじなふ』なんて出來つこない、などと云つて聞かしても駄目だ

と思つたので、別に言葉を返さなかつた。それに、車はもう門の中に入つてしまつた。

アンヌシカは家にゐなかつた。もうちやんと歸つて來て、葎の入つた籠を置いたまゝ、どこかへ行つてしまつたのである。エロフェイは新しい心棒を先づこつ酷く値ぶみしてから、車に取りつけた。一時間ばかりして、私は出發した。別れ際に少しばかりの金をカシヤンに置いて行つた。カシヤンは初め受け取らうとしなかつたが、やがてちよつと思案した後、掌の上に暫らく載せてから懐にしまつた。この一時間の間、彼は殆ど一口も物を云はなかつた。相變はず門に凭れたまゝ、馭者にこゝとを云はれても受け答へをせず、私にも甚だ素つ氣ない別れの挨拶をした。

私は歸りつくが早い、馭者のエロフェイがまたぞろ浮かぬ様子をしてゐるのに氣がついた。それもある筈、この村では何一つ食べ物が見付からなかつたし、馬の水飼ひ場もひどかつたのである。私たちは出かけた。エロフェイは後ろ姿にさへ不足らしい様子を見せて馭者臺に坐り込み、私に話しかけてくたく堪らないくせに、私の方から問ひかけるのを待ち受けながら、小さい聲でぶつ／＼云つたり、馬に向かつてお説教めいたことを云つたり、時には皮肉らしい言葉を洩らしたりするだけで、やつと我慢してゐた。

「村だつて！」と彼はぶつくさ云ふのであつた。「あれでも村なのか！　高がクワスぐらゐ買はうと思つても、クワスもありやしねえ……やれ、やれ、呆れたもんだ！　それに水ときたら、それこそべつ、べつだ！（と音のするほど唾を吐いた。）胡瓜もなけりや、クワスもねえ——なんにもありやしねえ……はい、どう」と、彼は右の脇馬に向かつて大きな聲で附け足した。「てめえの腹の中は分かつてるぞ、この横着者め！　白つぱくれるのが大好きなんだらう……（かう云つて一鞭



くれた。すつかりずるけ癖がつきやがった、畜生。もとはとても聞き分けのいゝ馬だつたに……ほうら、氣いつけるよ……」

「あゝ、さうだ、エロフェイ」と私は云ひ出した。「あのカシヤンてのはどんな人間だい？」

エロフェイは直ぐには返事をしなかつた。この男は一體に考へ深い、ゆつくりと落ちついた人間なのである。けれど、私に問ひかけられて嬉しくなり、ほつと安心したらしいのは、すぐさまそれと察しられた。

「蚤のことですかね？」到頭エロフェイは手綱をぐいと引いて云ひ出した。「變はり者ですよ。全く氣が變なんですか。あんな變はり者はちよつと他に見付かりませんや。まあ、喻へてみりや、それ、この葦毛の奴とそつくりそのまゝでがすよ。何をやつても手につかない……仕事なんか尙更のことで。そりや、もう、働き人なんて考へられるのですか、骨と皮ばかりなんですがすからね、まあ、それでも……なんせ、餓鬼の時分からあの通りなんです。初手は自分の伯父貴たちと馬力をやつてゐたものでがすよ。馬車は三頭立てを使つてをりましたつけ。さあ、ところが、そのうちに倦きが来て——おつ放り出して了つた。で、我が家で暮らすやうになつたが、さて、家に尻が据わらない。まことに落ちつきのねえ奴で——全く蚤ですか、まあいゝ按配に、優しい旦那に當たつたもんだから、無理に働かされもしなかつたんですがね。かう云つたわけで、それからといふもの、まるで野放しの羊同然、のべつうろ／＼歩き廻つてをりますわ。いやはや、得體の知れねえ不思議な奴で、切り株みてえに黙りこくつてゐるかと思ふと、今度は急にべら／＼喋り出す。——しかも何を喋つてるのか、ちんぷんかんぷん分かりやしませんや。一體あんな法つてあるもんですかね？　ありや法に外れてまさあ。全く突拍子もねえ野郎ですよ。でも歌は上手で、

こんな風に勿體をつけてね——なか／＼相當なもんです。」

「だが、どうだね、病氣の療治をするつてのは、本當かね？」

「なんの、療治なんか！　へん、あいつにそんなことが出来ませうかい！　そんな柄ぢやありませんよ！　尤も、わつしの癩癩を癒しちやくれましたがね……どうしてあいつなんか！　正真正銘の馬鹿でさあ。」暫らく黙つてゐた後で、彼はかう云ひ足した。

「前からあの男を知つてゐるのかい？」

「さやうで。わつしら二人は、クラシーワヤ・メーチのスイチヨフカで隣り同志だつたもんですから。」

「ところで、あの森の中で出會はした娘、アンヌシカとやらは何にあたるんだね、あれの身内なのかい？」

エロフェイは肩越しに私を振り返つて、一杯に口を開けながら笑つた。

「へゝ……さやう、身内ですか。あの子はみなしごで、母親がねえんですが。第一、誰があれの母親だか、それさへ分からねえやうな始末で。まあ、きつと身内なんでせうよ。恐ろしくあいつに似てゐますからね……とにかく、あいつのどこにゐますよ。はしつこい娘で、文句なしにいゝ娘でがすよ。あの親爺、眼に入れても痛くねえほど可愛がつてゐまさあ、いゝ娘でしてね。それであるの男、旦那様は本當にやなざるまいが、あいつはアンヌシカに讀み書きを教へてやらうなんて考へてるらしいんで。あの男なら、本當にやりかねないこつて、何にしても桁はづれな男ですからねえ。氣の定まらない、突拍子もない野郎で……どう、どう、どう！」駁者はだしぬけに、自分で自分の話を斷ち切りながら、馬を止めて、横に身を乗り出し、鼻をひく／＼さした。「こり



やたしかに焦げる臭ひらしいぞ！ やつぱりさうだ！ どうも新らしい心棒といふ奴は……あれほどふんだんに油を塗つておいたんだが……どら、水でも汲んで来るかな。あゝ丁度さいはひ、池がある。」

エロフェイはゆつくりと馭者臺から下りて、手桶を解いて池の方へ出かけて行つた。歸つて來ると、不意に水をかけられた車輪の轂がしゅんと鳴るのを、満足さうに聞いてゐた……十露里ばかりしか行かない間に、彼は熱くなつた心棒へ六遍も水をかけなければならなかつた。私たちが家へ歸つた時には、もうとつぷり日が暮れてゐた。

### 支配人

私の持ち村から十五露里ばかりのところに、一人の知り合ひが住んでゐる。若い地主で、退職した近衛の將校で、アルカーディ・パーヴルイチ・ペノーチキンといふのである。この男の領地には、野の禽が澤山ゐた。邸は佛蘭西の建築家の設計によつて建てられ、召使ひたちは英國風の服装をしてゐるし、客のもてなしは懇ろを極め、食事には素晴らしい御馳走が出る。が、それでゐて、なんとなくこの男の家へは足が向かないのである。彼は分別のある、しつかりした男で、教育も多分に洩れず立派に受けてゐるし、軍隊にも勤めた事があり、上流社會にも交つて來て、今では領地の經營に従つて、十分な効果をあげてゐる。アルカーディ・パーヴルイチは、彼自身の言葉を藉りて云へば、嚴格ながら公平で、領地内の百姓たちの福祉を旨とし、彼らのためを思へばこそ懲罰も加へるのである。『農民は子供のやうに取り扱はなければなりません。』と彼はこんな場合によく云ひ云ひした。『無智といふものも、貴方、考慮に取り入れなければなりません。』さういふ御當人は、所謂悲しむべき必要の生じた場合、激烈なかどのある動作を避けて、聲を荒らげるのを好まず、いきなり相手を突つゝきながら、落ちつき拂つて云ひ聞かせる。『ねえ、お前、私はそんな事をしないでくれと、頼んだぢやないか。』とか、『どうした事だ、お前、思ひ直してくれないか。』などと云ふのだが、それにつれてちよつと齒を食ひしぼり、口を歪めるのである。背は餘り高くないけれど、風采がはいからで、男ぶりも中々よく、手や爪を特別よく手入れしてゐて、紅い唇や頬からは如何にも健康さうな感じが流れ出してゐる。朗かに苦のなきさうな笑ひ聲



を立てて、明るい鳶色の眼を愛想よく細める癖がある。服装はりゆうとして、いゝ嗜みを見せ、佛蘭西の書物や畫や新聞などを取り寄せてゐるが、讀書は大して好きな方でもなく、『さまよへる猶太人』一冊を讀んだのが關の山である。骨牌にかけては名人であつた。いはばまあ、アルカーディ・パーヴルイチは縣内でも最高の教養を持つた貴族で、花婿の候補としては最も目星しい連中の一人で、婦人たちは彼のこととなると夢中になり、殊に彼のものごしを褒めちぎる。彼は驚くばかり鮮かに身を持って、猫のやうに用心深く、生まれてこの方、一度も如何はしい事件に捲き込まれた事がない。そのくせ、時と場合によつては骨のあるところを見せて、臆病な人間の度膽を抜いたり、へこましたりするのが好きなのである。悪い仲間と交際ふのは大禁物——名前にかゝるのが恐ろしいのである。その代はり御機嫌の時には、エビキュールの崇拜者と名乗るけれど、大體が哲學者といふものを悪し様に云つて、獨逸人どもの食べる泡のやうなものだとか、時には、たゞの世迷ひ言などと評するのである。音楽もやはり好きで、骨牌を闘はしながら、鼻唄ではあるが情の籠もつた聲で歌を唄ふ。『リュチャ』とか『ソムナンブーラ』などもところどころ覚えてゐるが、どうも調子が高くつり上がりたがる。冬になると、テルブルグへ出かけて行く。邸は類のないほどきちんとしてゐて、馭者たちまでがその風に從つて、毎日馬具や外アルミキヤク套の手入れをするばかりでなく、自分の顔までちゃんと洗ふのである。アルカーディ・パーヴルイチの家の子どもは正直なところ、なんだか上眼づかひに人の顔色を窺ふが——わが露西亞國では、氣難かしい顔と寝呆けた顔との區別がつけにくい。アルカーディ・パーヴルイチはもの柔かな氣持のいゝ聲で話をして、ゆつくり間マを置きながら、香水の滲み込んだ美しい髭の間から、さも満足さうに一句一句洩らすのである。それから、佛蘭西語もふんだんに遣ふ。例へば『いや、これは

素晴らしい！』とか『いや、それはむろん！』などの類ひである。かういふ事は幾らでもあるけれども、少くも、私は彼の家を訪問するのが億劫であつた。もし、えぞやまどりや、しやこがゐなかつたら、恐らくすつかり絶交してゐたに相違ない。彼の家に行くと、なにか妙な不安にとりつかれる。行き届いたもてなしも有難く思はれない、いつも夕方獵から歸つたとき、髪に鏝をかけた従僕が、紋章入りの釦をつけた淺黄色の四季施を着込んで、目の前に姿を現はし、鞠躬如として長靴を脱がしてくれると、私はこの蒼白い顔をした瘦せた男の代はりに、野良から取り立てられたばかりなのに、もうこのあひだ頂戴した南京木綿の長上着カッパンを十箇所も綻ばしてゐようといふ、矢鱈に廣い頬骨に呆れるやうな團子鼻をした頑丈な若い衆が、ひよつこり出て来てくれたら、さぞかし嬉しからうと思つた——そんな若い衆だつたら、長靴と一緒に自分の足を膝頭から引つて抜かれるやうな憂き目にあつてもいゝ、といふやうな氣持ちになるのだ……

私はアルカーディ・パーヴルイチを蟲が好かなかつたにも拘らず、ある時、彼の家で一夜を過ごさなければならぬ破目になつた。翌日、私は朝早く馬車の支度をするやうに命じたけれど、彼は英國風の朝食を振舞はなければ私を歸さないと云つて、自分の書齋へ案内して行つた。お茶と一緒にカツレツ、半熟玉子、バター、蜂蜜、チーズなどが出た。眞つ白な手袋をはめた二人の従僕が、一々云はなくても黙つて機敏に用を足してくれる。私達は波斯風のソファに腰かけてゐた。アルカーディ・パーヴルイチはだぶ／＼した小露西亞風の絹ズボンジヤンツを穿き、黒天鵞絨の短上着ジャケットをつけ、青いふさのついた美しい土耳其帽をかぶり、支那風の黄色いスリッパを穿いてゐた。彼は茶を飲んだり、笑つたり、自分の爪を見から見したり、クッションを脇腹にあてがつたりして、總じて極上の機嫌らしかつた。如何にも満足さうに、腹いっぱい朝食をしたゝめたアルカーディ



・パーヴルイチは、手づから赤葡萄酒をグラスについて、唇の傍まで持つて行つたかと思ふと、急に眉を擡めた。

「なぜこの葡萄酒は暖めてないのだ？」と彼は可成り尖つた聲で、從僕の一人に訊いた。

從僕はどぎまぎして、釘づけにされたやうに棒立ちになり、さつと顔色を變へた。

「これ、訊ねてあるぢやないか？」アルカーディ・パーヴルイチは從僕から眼を離さずに、落ちついて言葉を續けた。

運の悪い從僕は、その場でもぢく／＼しながら、ナプキンをひねくり廻すだけで、一ことも云はなかつた。アルカーディ・パーヴルイチは顔を伏せて、上眼づかひに物思はしさうな風で相手を見つめた。

「失禮しました。貴方、」さも親しげに私の膝に手を觸れて、氣持ちのいゝ微笑を浮かべながらかう云つた後、またもや從僕に眼を据ゑた。「さあ、行きなさい。」暫らく黙つてゐた後で、彼はかう云ひ足して、眉をあげ、呼鈴をならした。

入つて來たのは、肥つた顔色の淺黒い、黒い毛をした、額の狭い、臉のすつかりだぶ／＼になつた男である。

「フョードルのことは……いゝやうにな。」とアルカーディ・パーヴルイチは、少しも昂奮した様子を見せないで、小聲に云つた。

「畏りました。」と肥つちよは答へて、出て行つた。

「こんな風で、貴方、田舎住ひはいろ／＼いやな事がありましてね。」とアルカーディ・パーヴルイチは愉快さうに云つた。「おや、貴方、どちらへ？　まあ、いゝぢやありませんか、もしゆつ

くりなすつたら。」

「いえ、」と私は答へた。「もうお暇しなくちや。」

「また、獵ですか！　いや、銃獵家といふものは仕様のないもんですな！　ですが、これからどちらへお出かけなんで？」

「こゝから四十露里ばかりのところですよ。リャボーヲへね。」

「リャボーヲへ？　あゝ丁度いゝ、さういふ事なら、私も御一緒にお伴いたしませう。リャボーヲは私のシュピーロフカから、たつた五露里しか離れてません。もう大分前からシュピーロフカへは行かないでゐましたよ、どうも機會がなくてね。こりや丁度いゝついでだ。あなた、今日リャボーヲで鳥撃ちをなすつたら、晩には私どもへおいで下さい。これは話が面白くなつて來た。

御一緒に晩の食事をしませう。——私は料理人を連れて行きますから——貴方も宅で一泊して下さい。素敵、素敵！」私の挨拶も待たないので、彼はかうつけ足した。「これで話はまとまつた：おい、誰かゐらないか？　幌馬車の用意を云ひつけてくれ、大急ぎだぞ、貴方はシュピーロフカにいらつしやつた事がないでせう？　失禮ですが、うちの支配人の小屋で一夜を過ごしてごらんになりませんか、私の存じ上げてゐるところでは、貴方は餘りそんな事をお構ひにならない方で、リャボーヲでも乾草小屋でお寝みになるくらゐなものでせう……さあ、出かけませう、出かけませう！」

から云ひながら、アルカーディ・パーヴルイチは何か佛蘭西の小唄を歌ひ出した。

「ときに、貴方は御存じないかも知りませんが、」立つたまゝ身體をゆらく／＼させながら、彼は言葉を續けた。「私はあそこの百姓を小作料制度にしてゐるんですよ。それがうちの憲法ですから——



「どうも仕方がありません。でも、小作料はきちん／＼と納めますよ。白状しますと、私はずつと前から義務耕作をやらせた筈なんです。何分土地が少いもんでしてね！ どうしてあの連中が帳尻を合はして行くのか、不思議に思つてゐるくらゐなんです。尤も、それは奴等の知つた事です。あすこに置いてゐる支配人は遣り手でしてね。頭のしつかりした奴で、政治家なんですよ！ 今に御覽になりますかね……でも、全くのところ、實にいゝ折ですよ！」

もうどうにも仕方がなかつた。朝の九時といふのが午後の二時になつて、私たちはやつと出掛けることになつた。銃獵家諸君には、私のじめつたい氣持ちが分かつて貰へるだらう。アルカーデイ・パーヴルイチは、彼自身の云ひ草を借用すると、時々、自分に法樂をさせてやるのが好き。なたちで、肌着類や、附屬品や、着物や、香水や、クッションや、様々な手廻りの品々を、儉約家で意志の堅固な獨逸人なら、結構一年ももちさうな位、しこたま用意して行つた。

坂道を下りる度に、アルカーデイ・パーヴルイチは簡單ながら、力のこもつた注意を馭者に與へるので、私はそれから推して、この知人が可成りな臆病者だと結論することが出来た。とは云へ、道中無事にすんだ。たゞ近頃修理したばかりの小さな橋の上で、料理人を乗せた馬車が倒れて、車の後輪が料理人の腹を押しつけた位なものである。

アルカーデイ・パーヴルイチは田舎出來のカレムが落ちたのを見て、冗談でなく吃驚仰天し、早速腕は無事かと訊きにやつた。無事だといふ返事を聞くと、直ぐに安堵の胸を撫で下ろした。それやこれやで、道中は可成り長くかゝつた。私はアルカーデイ・パーヴルイチと同乗してゐたが、道も終りに近づく頃には、やり切れないほど退屈になつて來た。別して最後の數時間のあひだに、同乗の知人がすつかりへばつて、下らない自由主義論など振り廻し始めたのだから、なほ

さら堪つたものぢやなかつた。やつとのことで私たちは到着した。が、それはリヤボーフでなくて、シュピロフカへいきなり來てしまつたのである。どうしたものか、そんな事になつたのであつた。當日はそれでもなくとも、もう獵などするわけにはゆかなかつたので、胸を押し撫でながら、成り行きにまかせた。

料理人は私たちよりちよつと早目に着いたので、もうそれ／＼手配をして、然るべき人たちに前觸れしたらしく、私たちが村はづれまで來ると、百姓頭（支配人の息子）が迎へに出てゐた。頭丈な赤毛の六尺豊かな大男で、帽子もかぶらずに、新らしい外套の前をはだけて、馬に跨がつてゐる。「ソフロンはどこにゐる？」とアルカーデイ・パーヴルイチは訊ねた。百姓頭は先づ、馬からひらりと飛び下りて、且那にいと重なお辭儀をして、「御機嫌よろしうございます、アルカーデイ・パーヴルイチ様」と挨拶した。それから頭を上げ、身體を一つ揺すつて、ソフロンはペロフへ出かけたが、もう迎へに人をやつた旨を言上した。「さあ、後から蹤いて來い。」とアルカーデイ・パーヴルイチは云つた。百姓頭は恭々しく馬を脇の方へ寄せて、どつかとばかりその背に跨がると帽子を手に持つたまゝ、幌馬車の後から小刻みな足取りで馬を走らせた。私たちは村の通りを進んで行つた。空車に乗つた幾人かの百姓が向かうからやつて來た。それは穀打場からの歸りで、全身を跳らせ、足を宙にぶら／＼させながら唄をうたつてゐたが、私たちの幌馬車と百姓頭の姿を見ると、急にびつたり唄ひやめて、被つてゐた冬帽子（折から夏なのに）を脱いで、命令でも待つやうに腰を持ち上げた。アルカーデイ・パーヴルイチは慈愛に充ちた様子で會話をした。不安の氣を含んだ動搖が村中に瀰がつて行つたらしい。格子縞の腰巻をした女房たちは、忠義立てに吠えしきる察しの悪い犬に木ぎれを投げつけるし、目の下の邊から鬚を生やした



跛の爺さんは、まだ水を飲み終らない馬を井戸端から引き離して、何のためか分からないが、横つ腹をどやしつけ、さてそれからお辭儀をした。長い襦衣を着た子供らは、喚き聲を上げながら家の中へ駆け込み、高い閤の上に腹這ひになつて、頭を下げ、足を宙に押つ立てながら、あつといふ間に戸のかけに身を懸へし、そのまゝ暗い玄關へ隠れてしまつて、それきり二度と姿を見せなかつた。鶏までが足を早めて、一目散に門の下へ逃げ込んだ。たゞ一羽、縹子のチョッキのやうな黒い胸毛をして、とさかのあたりまで赤い尻尾を捲き上げてゐる勇敢な雄鶏が、往來に踏み止まつて、まさにときを作らうとしかけたけれど、急にてれて同じやうに逃げ出した。支配人の小舎は他の家から離れて、青々と繋つた大麻畑の中に立つてゐた。私たちは門の前に馬を止めた。ペノーチキン氏は立ち上つて、氣取つてマントを脱ぎ捨て、愛想よく四邊を見廻した。馬車を出た。支配人の細君が小腰を屈めながら迎へに出て、御主人の手に接吻をしようと近寄つた。アルカーディ、パーヴルイチは思ふ存分接吻をさせて、入口の階段に昇つた。玄關の薄暗い隅に百姓頭の女房が立つてゐて、これもまた小腰を屈めたが、御主人の手に口を寄せるだけは遠慮した。所謂夏小舎(暖爐の設備のない部屋)——玄關の右手に當たる部屋には——もう二人、別の女が忙がしさにしてゐた。空き瓶や、棒のやうになつた毛皮外套や、油じみた壺や、いろんな襪襦ぎれをつめておできだらけの赤ん坊を寝かした揺籠や、その他ありつたけのやくざものを運び出し、風呂箒で芥を掃き出してゐる。アルカーディ、パーヴルイチは、その二人を追ひ出して、聖像の下の床几に腰をかけた。馭者どもはトランクや、函や、その他什器類をかつぎ込みながら、重たい長靴の音をなるべく立てないやうにと、一生懸命に苦心してゐる。

その間にアルカーディ、パーヴルイチは百姓頭に向かつて、とりいれのことや、蒔きつけのこ

とやその他いろ／＼農作のことを訊ねてゐた。百姓頭は納得が行くだけの返事はしてゐたが、その話し振りがだらけて窮屈さうで、まるでかじかんだ指で長上着の釦をかけるやうなまどろっこしさであつた。彼は戸口の所に立つてゐたが、絶えず氣をつかつて振り返りながら、はしつこい従僕に道をあけてやつてゐた。この男の逞しい肩越しに、支配人の細君が玄關でこつそりと誰か他の女を叩いてゐるのが見えた。突然馬車の轍の音がして、階段の前に止まつた。支配人が入つて來た。

この、アルカーディ、パーヴルイチの所謂『政治家』の腕を持つた男は、背こそ大きくないが、肩幅が廣くて、胡麻鹽頭で、肉付きがよく、赤鼻で、小さな青眼を光らせ、扇形の髯を生やした男であつた。序に云つておくが、露西亞が關つてこの方、懐が暖まつて肥つた人間で、達磨髯を生やしてゐなかつたためしはかつてない。中には、ずつとしよつちう不景氣な天神髯を生やしてゐた者が、急に金が出来ると、さながら後光のやうな髯が顔を取り巻いてしまふ？一體どこからこれだけの毛が現はれたのだらう、と怪しまれるばかり！ さて、支配人はペロフで一杯召し上がったと見えて、顔はいゝ加減でらく／＼してゐるし、酒の匂ひもぶん／＼してゐる。

「あゝ、これは／＼、父とも申すべきお慈悲深い御前様、」と彼は歌でも唄ふやうに云ひ出した。その顔は今にも涙が迸り出さうな感激の色を現はしてゐる。「やつこのことで御光臨の榮を得ました……お手を、どうか、お手を。」もう手廻しよく唇をつき出しながら、彼は云ひ足した。

アルカーディ、パーヴルイチはその望みを叶へてやつた。

「で、どうだね、ソフロン、仕事の方はうまく行つてゐるかね？」と彼は優しい聲で訊ねた。「あゝ、御前様、」とソフロンは叫んだ。「どうしてうまく行かないわけがございませう！ 父と



も云ふべきお慈悲深い御前様のお出でで、この瘦せ村が明るくなりました。生涯、死ぬまで仕合せにして頂きました。まことに有難いことで、アルカーディ・パーヴルイチ、有難いことでございます！ あなた様のお慈悲を持ちまして、何もかも無事でございます。」

こゝでソフロンはちよつと言葉をやめて、主人を眺めた。すると、又しても感きはまつたやうに（おまけに酒のきゝめも出て来て）、もう一度お手に接吻をさしてもらひ、前より餘計に唄ふやうな調子で云ひ出した。

「あゝ、父とも頼むお慈悲深い御前様……いや……今さらこんな事を申し上げたつて！ 全くのところ、嬉しさの餘り頭がぼつとなつてしまひました……全くの話、かうしてお顔を拜見してゐながらも、なんだか本當になりません……あゝ、お慈悲深い御前様……」

アルカーディ・パーヴルイチは私の顔をそつと見て、にやりと笑ひながら、『しほらしいものぢやありませんか？』と訊ねた。

「したが、アルカーディ・パーヴルイチ様、」と支配人は止め度なくまくし立てる。「全體どういふわけでございますか？ 私はもう情けなくなつてしまひました。御前様、お越しになる事を前もつてお知らせ下さいませぬものですから、今夜はどちらでお寝み遊ばしますか？ 何分こゝは不潔で、ごみだらけなので……」

「構はんよ、ソフロン、構はんよ、」とアルカーディ・パーヴルイチは莞爾やかに答へた。「こゝで結構だよ。」

「でも、お慈悲深い御前様——これを結構といふのは誰でございますか？ われ／＼百姓風情なら結構でもございますが、あなた様は……あゝ、お慈悲深い御前様、あゝ、あなた様は、父とも

頼むお方でございますから……どうかこの馬鹿者をお許し下さいまし、嬉しさに気が違つてしまひました。全く、頭が呆けてしまひました。」

さうかうしてゐる間に、夜食が出た。アルカーディ・パーヴルイチは食べにかゝつた。ソフロ

ン老人は悴の百姓頭を追ひ拂つた——悪臭い匂ひをさせるといふので。

「ときに、どうだね、爺さん、境界定めは終へたかね？」とペノーチキン氏は問ひかけたが、まさに百姓言葉を真似たつもりで、私にちらと目配せして見せた。

「終へましてございます、御前様、これといふのも、みんなあなた様のお蔭で、一昨日、臺帳に書き込みましたよ。初めフルイノフの連中がじぶくりましてな……全くじぶくつたわけでした。

あゝのかうのと、註文をつける……さん／＼に註文をつけましたが……それが途方もない註文なので。何しろ阿呆の寄り合ひで、御前様、馬鹿な奴らでございますよ。ところが、御前様、私どもはお蔭様で、間に立つて下さつたミコライ・ミコライッチに厚くお禮を申して、御満足の行くやうにして差し上げました。何から何までお指圖通りに致しましたので、御前様かねてお申し付けの通りに致しました。それにエゴール・ドミートリッチにお含みを願つて取り計ひました。」

「エゴールからその報らせがあつたよ。」とアルカーディ・パーヴルイチは勿體らしく云つた。

「さやうでせうとも、御前様、エゴール・ドミートリッチなら、さやうでせうとも。」

「さあ、して見ると、お前たちもこれで満足だらうな。」  
ソフロンは、待つてみましたとばかりに、「あゝ、父とも頼むお慈悲深い旦那様！」と、彼はまた唄ひ出した……「どうか私どもを可愛がつてやつて下さいまし……まつたく、みんな御前様のことを朝晩、神様にお祈りして居ります……そりやもう地面は不足がちでございますけれど……」



ペノーチキンは遮つた。「いや、よろしい、よろしい、ソフロン、分かつてゐるよ、お前は私に忠義をつくしてくるんだからな……だが、どうだね、麥の出來高は？」

ソフロンは吐息をついた。

「どうも御前様、出來高は餘り感心しかねますので。まあ、それはそれとして、アルカーディ・パーヴルイチ様、ちよつとお耳に入れさせて頂きますが、とんでもない事が持ち上がりましてな（こゝでソフロンは両手を擴げながら、ペノーチキン氏に近よつて身を屈めると、片方の眼を細めた。）私どもの地面に死骸が見つかりましたので。」

「え、なんだと？」

「私も、はや、解しかねます、父とも頼む御前様。どうやら仇敵の仕組んだ、細工らしいでございます。まあ、仕合はせと他人の地境ひに近いところで見つかつたのですが、隠し立てしても始まりませんから有り態に申しますが、手前どもの地所には違ひございません。私は早速それを、よその島の出つばつてる所へ、人に知られない間に引つばつて行かせまして、おまけに張り番をつけた上、村の者には、『黙つてろ！』と申しつけました。駐在所の巡查には萬一を思つて、『かくかくの始末で』と應へておいて、ちよつと御馳走をした上に袖の下をね……そこで、御前様、如何お思召し遊ばされますか？ まんまと隣り村へお荷物を押しつけてやりましたよ。何しろ、死骸一つの始末には二百ルーブリくらゐ間違ひなくかゝりますからね。」

ペノーチキン氏は支配人のからくりで大笑ひして、頸でソフロンを指して見せながら、幾度も私に『なんと面白い奴でせう、え？』と云つたものである。

その間に、外はすつかり暗くなつた。アルカーディ・パーヴルイチは食卓を片付けさせ、乾草

を持ち込むやうに云ひ付けた。従僕が私たちのために乾草の上へ敷布をしいて、枕を並らべてくれた。私たちは横になつた。ソフロンは翌日の指圖を承つて居間へ引き取つた。アルカーディ・パーヴルイチは眠りに入る前に、また露西亞の百姓の優れた性質をいくさり論じたが、すぐその後から、ソフロンが支配人になつて以來、シユピエロフカの百姓たちが一コペイカの滞納もしなくなつたと自慢した……夜廻りが板木を叩き出した。地主様に對する遠慮といふ氣持がまだ呑み込めないらしい赤ん坊が、小舎のどこかでびい／＼泣き出した……私たちはやがて眠りにおちた。

翌朝はかなり早く眼を覺ました。私はリヤボーヲへ行く支度をしたが、アルカーディ・パーヴルイチが自分の領地を見せたがるので、私はその乞ひを入れて足を止めた。それに私自身も、政治家的手腕を有するソフロンの優れた性質を實地に確かめるのもよからうと思つたので。支配人が現はれた。青い外套を着て、赤い帯を締めてゐる。昨日に比べると、ずつと口數が少く、油斷のない眼付きをして、ちよつと主人の眼をみつめながら、きちんとした要領のいゝ返事をする。私達は彼と一緒に穀打場へ行つた。ソフロンの悴で六尺豊かな百姓頭、これはどこから見てもかなり低能らしい男だが、同じく後から蹤いて來た。おまけに、村の書記のフェドセーキツチが行に加はつた。豫備の兵隊で、大きな口髭を生やし、挺妙な顔をしてゐる。ずつと前に何かにひどく吃驚して、それ以來ずつと正氣に返れない、といふやうな顔つきである。私たちは穀打場や穀倉や、乾燥小屋、物置、風車、家畜小屋、野菜畑、大麻畑などを見て廻つたが、觸れ込み通りに何も彼もよく整頓してゐた。たゞ百姓たちの悄氣た顔が、いさゝか不審の念を抱かせた。ソフロンは實用といふもの許りでなく、體裁といふことにもこゝろを用ひてゐた。溝のふちに、すつ



かり楊の木を植ゑ並らべ、穀打場の禾堆こたの間には小徑をつけて、砂を撒き、風車小屋には、口を開けて赤い舌を出した熊の形の風信子を取附け、煉瓦造りの家畜小屋には希臘風の破風めいたものをつけ、その破風の下は『此家畜場壹千八百四十年シピロフカ村に之建』と、白い字で書いてあつた。アルカーヂイ・パーヴルイチはすつかり感傷気分になつて、小作料制度の利益を、佛蘭西語で數へ上げ始めたが、そのくせ義務耕作の方が地主にとつては有利だと云つた——まあ、こんな事を拾つてゐたらきりが無い：彼は支配人をつかまへて、馬鈴薯の植ゑ方だの、家畜の餌の作り方だのを講釋し出した。ソフロンは畏まつて御主人の言葉を聞き乍ら、とき／＼異議を挟んだけれど、もはやアルカーヂイ・パーヴルイチを、慈悲深いとも、父のやうなともそやし立てないで、たゞ地面が不足がちで困るから、もう少し買ひ足しても悪くないだらう、とその事はかりにこだはつてゐた。『なに、買つたらよからう。』とアルカーヂイ・パーヴルイチは云つた。『私の名儀なら差支へはないよ。』これに對しては、ソフロンは一言も答へないで、たゞ鬚を撫でるばかりであつた。『だが、これから森へ行つて見るのも悪くないな。』とペノーチキン氏は云ひ出した。すぐに私たちの所へ乗馬が曳いて來られた。私たちは森、この地方で俗に云ふ『禁伐林』へ出かけた。この『禁伐林』で凄いほど鬱蒼とした場所（盜伐の難に遭はなかつたことを意味する）を見つけたので、アルカーヂイ・パーヴルイチはソフロンを賞めそやして、軽くその肩を叩いた。ペノーチキン氏は植林に關しては露西亞風の考へ方を守つてゐて、即座に彼の所謂、愉快この上ない事件を話して聞かせた。それはある剽輕な地主が自分の森の山番を懲らしめるのに頸鬚を半分ばかり捲り取つて、森の樹を伐ると元の通りには茂らないぞ、といふ事を證明してみせたのである。尤も他の事にかけては、ソフロンもアルカーヂイ・パーヴルイチも——二人ながら、新しい遣り口を嫌つてはる

なかつた。村へ歸つてから、支配人は私達を案内して、近頃モスクワから取り寄せた穀分け機を見せてくれた。なるほど穀分け機は具合が好かつた。けれど、もう見物もお終ひになつたこの場所、とんでもない厭な事が彼ら主従を待ち受けてゐたので、もしそれと知つてゐたら、ソフロンは恐らくこゝまで案内しては來なかつたに相違ない。

それけかういふことが持ち上がったのである。私たちが納屋から出て來ると、次のやうな光景が眼に入つた。戸口から數歩離れたところに、泥つぽい水たまりがあつて、家鴨が三羽のん氣らしく水を跳ねかしてゐたが、その水たまりの傍に百姓が二人立つてゐた。一人は六十ばかりの老人で、もう一人ははたちそこ／＼の若いもの、二人ともつぎだらけの家着らしい襦袢（ハカマ）を着て、跣足で、繩の帶をしめてゐた。書記のフェドセーキツチがその傍で、一生懸命にやきもきしてゐる。もし私たちが納屋でもつとぐ／＼してゐたら、うまく説きつけて追ひ歸したかも知れないのだけれど、私たちの姿が眼に入つたので、フェドセーキツチは弓のやうに反つくり返つて、その場にちつと立ち竦んでしまつた。そこには又、百姓頭が口をぽかんと開けて、拳固の始末に困りながら、ぼんやり立つてゐた。アルカーヂイ・パーヴルイチは顔を鑿めて、唇を噛みしめ、請願人の傍へよつた。二人は黙つて彼の足もとに顔をすりつけた。

「お前たちはなんの用なんだ？ どういふ願ひ事だ？」と、彼は幾らか鼻にかゝる嚴めしい聲で訊ねた。（百姓らは互ひに顔を見合はして、一言も口を利かず、たゞ眩しさうに眼を細めて、せはしなく呼吸をはずませたばかりであつた。）

「おい、どうしたんだ？」とアルカーヂイ・パーヴルイチは言葉を續けて、直ぐにソフロンの方へ振り向いた。「どこのうちのものだ？」



「トボレフの家族のもので。」と支配人はゆつくり答へた。  
 「さあ、どうしたと云ふんだ？」とペノーチキン氏は又云ひ出した。「いつたい舌がないのか？  
 どうして欲しいのか、云つたらいゝぢやないか？」老人の方を一つ顎でしゃくつて、かう云ひ足  
 した。「さあ、びく／＼する事はない、馬鹿。」

老人はどす黒い蒼色をした皺だらけの頸を伸ばし、紫色になつた唇をひんまげて、しやがれた  
 聲で云ひ出した。「殿様、お助けを！」と云ふなり、また額をこつんと地べたへぶつつけた。若い  
 方の百姓も同じやうにお辭儀をした。アルカーディ・パーヴルイチは威を帯びた様子で、二人の  
 頸筋をじろりと見て、頭を反らし、やゝ足をふみ開いた。

「何事だ？ 誰の苦情を云ひに來たのだ？」

「殿様、お慈悲でござえます！ どうか、ちよつくら息をつかして下せえまし……すつかり苛め  
 つけられちまつて。」（老人はやつとの事だから云つた。）

「誰がお前を苛めたのだ？」

「あのソフロン・ヤーコヴリツチなので、旦那様。」

アルカーディ・パーヴルイチは暫らく黙つてゐた。

「お前の名はなんと云ふ？」

「アンチープと申します、旦那様。」

「では、これは誰だ？」

「私の忤めでござえます、旦那様。」

アルカーディ・パーヴルイチはまた暫らく黙つて、口髭をひく／＼させた。

「ふん、では、どんな風に苛めたのだ？」髭越しに老人を見ながら、彼は口をきつた。

「旦那様、すつかり身上を潰さねえばかりにされました。上の息子二人を順番も來ねえのに兵隊  
 にやつた上、また今度は三番目のまで取つて行かうといふので。昨日などは、旦那様、たつた一  
 匹残つた牝牛を取り上げて、婆さまをひどい目に打ちのめしました。——これ、この仁が。」（彼  
 は百姓頭を指さした。）

「ふむ！」とアルカーディ・パーヴルイチは云つた。

「どうかすつかり身上を叩き潰されねえやうに、どうか、お願いでござります！」

ペノーチキン氏は顔をしかめた。

「それにしても、一體どういふわけだ？」と彼は聲を低めて、不満さうな様子で支配人に訊ね  
 た。

「飲んだくれなのでござりまする。」はじめて『ござりまする』といふ言葉をつかひながら、支配  
 人は答へた。「なまけものでして、もうこれで足かけ五年、未納の方の片がつかないのでございま  
 す。」

「ソフロン・ヤーコヴリツチが私の未納金を代りに納めて下せえましたので、旦那様、」と老人  
 は言葉を續けた。「納めて頂いてから、これ、もう五年目になります、納めて貰つたのはいゝけ  
 んど、私を牛馬同様にこき使つて、旦那様、その上にまだ……」

「どうして未納金なんか出來たんだ？」と、ペノーチキン氏は怖い顔をして訊ねた。（老人は頭を  
 垂れた。）「大方飲んだくれるのが好きで、居酒屋をぶら／＼渡り歩いてゐたんだらう？（老人は  
 口を開かうとした。）お前たちのやる事はちゃんと分かつてゐる。」とアルカーディ・パーヴルイチ



は頭ごなしに喋り續けた。「お前達の仕事は、酒を飲んで煖爐の上にごろ／＼してゐるだけのものだ。だから、正直に働く者が、お前たちの尻拭ひをしなけりやならなくなるんだ。」

「それに無作法な奴でして。」と支配人は主人の言葉に口を入れた。

「いや、もうそんな事は云はずと知れてゐる。それは何時もおきまりなんだ。私も再三氣がついてゐるよ。年がら年中、だらしのない眞似をして、不作法を働きながら、今更ひとの足もとに平つく這ふなんて。」

「旦那様、アルカーディ・パーヴルイチ」と、老人は生命がけになつて云つた。「どうぞ、お情けにお助け下さいまし——私がなんで無作法者でござえませう？ 神様の前に出たつもりで申し上げますが、もうどうにもはや、やり切れねえのでござえます。ソフロン・ヤーコヴリッチは私を憎んでおいでになります。どういふわけでお憎みになるのか、それは神様よりほか誰も分かりません！ とことんまで叩き潰さうとして居られますので……現にたつた一人残つた忤まで……その……（黄色い皺びた老人の眼には、涙がぼろりと覗いた。）お慈悲でござえます、殿様、どうかお助けを……」

「それに、わつし等ばかりぢやござえせん。」と若い方の百姓が云ひかけた。

アルカーディ・パーヴルイチは急にかつとなつた。

「誰が貴様にそんな事を訊いてる、あん？ 貴様なんか訊いちやゐないんだ。黙つてるがい、一體なんといふ事だ？ 黙つてろと云ふのに！ 黙れつたら黙れ……あ、呆れたものだ！ これはもうなんの事はない、一揆沙汰だ！ 駄目だよ、俺は一揆なんて眞似をさせやしないぞ……俺は……」アルカーディ・パーヴルイチは一步踏み出したが、多分わたしがゐる事を思ひ出した

のだらう、くるりと踵を轉じて、両手をポケットへ突つ込んだ。「どうも大變失禮いたしました。貴方。」と彼はすつかり聲を低めて、わざとらしく微笑みながら云つた。「これは農民の悪い方の半面です……いや、よろしい、よろしい」と、百姓の方を見ないで言葉を續けた。「私がちゃんと云ひ付けて置く……いゝから歸れ（百姓らは起き上がりとしなかつた）。さあ、今さう云つたぢやないか……よろしい。行くと云ふのに、わしの云ひ付けを聞かんか。」

アルカーディ・パーヴルイチは百姓らの方へ背を向けた。「いつもく不足ばかりだ。」と彼は齒の間から押し出すやうに云つて、大股に家の方へ歩き出した。ソフロンはその後から續いた。書記はどこか非常に遠いところまで飛ばうとするやうに、眼をまんまるくひん剥いた。百姓頭は水溜まりから家鴨を追ひ出した。二人の請願人はまだ暫らくその場に佇んで、互ひに顔を見合はしてゐたが、やがて振り返りもせず、とぼ／＼歸つて行つた。

二時間許り経つた時には、私はもうリャボーフに落ちつき、馴染みの百姓のアンバヂストを連れて獵に行く用意をしてゐた。私が出て行く間際まで、ペノーチキン氏はソフロンにむかつ腹を立ててゐた。私はアンバヂストに、シュピエロフカの百姓のことや、ペノーチキン氏のことを話して、あそこの支配人を知らないかと訊ねて見た。

「ソフロン・ヤーコヴリッチですかね？……あいつは！」

「どんな人間なんだね？」

「ありや犬がすよ、人間ぢやござえせん。あんな畜生はクルスクまで行つたつて、見つかりつこありませんや。」

「どうして？」



「だつて、シュピーロフカはたゞ名儀だけは、えゝと、なんと云つたつけない、あのペノーチキンのもものになつてゐるけれど、本當の持ち主はあの人ぢやなくつて、ソフロンなんですからね。」

「まさか？」

「まるで自分の財産と同じやうに扱つてまさあ。百姓らは一人残らずあいつに借錢してて、まるで日傭男みてえに、あいつのために働かされて居りますよ。荷馬車を追ひにやられるものもあれば、やれどこへ行け、こゝへ行けつて……すつかり苛めつけられてゐまさあ。」

「あそこは地面が少ししかないさうだね？」

「御冗談でせう？ あいつフルイノフの村からは八十町歩借りてるし、この村からは百二十町歩それに自分の村のが百五十町歩あるんですからね。おまけにあいつは土地ばかりを扱つてるんぢやなくて、馬も商賣にしてゐるし、やれ家畜類、やれタール、やれバタ、やれ麻といふ風に、なんだつて手掛けないものはないんで……賢い事はとてつもなく賢い奴で、金もうんと持つてゐやがる。あの悪黨め！ たゞ一つ悪い事は、すぐに手を振り廻す癖がある。ありや人間ぢやなくつて、獸でさあ。さつきも云つた通り犬だ、野良犬だ、全く野良犬だ。」

「ぢや、どうしてあいつを訴へないんだらう？」

「とんでもない！ 御主人にや掛け構へのない事ですあ！ 年貢の未納つて事はないんだから、何も文句はないぢやござえませんか？ 第一「まあ」と彼は暫らく言葉を切つてから、また云ひ足した。「訴へなんかして御覽なせえ。そんな事をしようもんなら、酷い目に遭はされますから……まあ、そうれ……それこそもう、あいつがぎゆう／＼云ふ目に遭はせまさあ……」

私はアンチープのことを思ひ出して、見たまゝを話して聞かせた。

「さあ、」とアンパヂストは云つた。「今にあいつはその爺さんを責め殺しますぞ。人間ひとり責め殺してしまひますぞ、百姓頭はこれからびし／＼ぶん撲るこつたらう。なんといふ運の悪い奴か、考へてみりや可哀さうだな！ しかも、なんでさう酷い目に遭ふかつちふと……寄り合ひであの支配人と少しばかり喧嘩口論したからでござえますよ。きつとよく／＼腹に据ゑかねたものと見えます……大したこつちやありません！ とところが彼奴はアンチープを苛めにかゝつたんで。いまに苛め殺してしまふでござえ。何しろあいつは本當の野良犬だ、犬畜生だ、どうか神様、私の悪たれ口をお赦し下せえまし。——だから、誰にかゝつて行つたらいか、ちやんと心得てゐやがる。多少でも金があつて、眷族の多い年寄り連にや、あの禿頭の悪黨め、手を出さうとしねえですがね。今度はすつかり取り返しのかねえ事になつちめえました！ そこで、アンチープの悴どもを順番も來ねえのに兵隊に出しまあががつた。情け容赦もねえ、いんちき野郎め、野良犬め、どうか神様、私の悪たれ口をお赦し下せえまし！」

私たちは獵に出かけた。

シレジア・ザルツブルンにて

一八四七年七月



## 事務所

秋のことであつた。もう数時間のあひだ、私は鐵砲を持つて野原を彷徨ひ歩いた。恐らく日暮れ前までには、三頭立ての馬車を待たしてあるクルスク街道の旅籠屋まで、とても歸り着けさうもない様子であつたし、恐ろしく細かな冷たい霧雨が、嫁かず後家にもおさ／＼劣らないほど、朝からしつこく斟酌なしに付き纏ふので、私は到頭、どこか手近かに假りの雨宿りを求めなければならなくなつた。どちらへ足を向けたものかと思案してゐる間に、ふと豌豆畑の傍に立つてゐる低い掛小舎が眼に映つた。私は小舎の傍へ行つて、藁庇の下を覗き込むと、すつかり老いさらばへた年寄りがあつた。私はすぐさま、ロビンソンがあゝの無人島の洞穴の中で見つけたといふ、死にかゝつた山羊のことを思ひ出した。老人はそこに蹲み込んで、視力の鈍つた小さな眼を瞑つて、まるで兎のやうにせか／＼と、しかも用心深く（可愛さうに齒が一本もなかつたので）堅い乾し豌豆を、のべつあちこち口の中で轉がしながら、もぐ／＼噛んでゐた。あんまりそれに氣をとられてゐたので、私が來たのにも氣がつかない程であつた。

「お爺さん！ おい、お爺さん！」と私は聲をかけた。

老人は噛むのを止めて、眉を高くつり上げ、やつとこさと眼を開けた。

「何だね？」と、しやがれた聲で、もぐ／＼と云つた。

「この近くに、どこか村があるかね？」と私は訊ねた。

老人はまた噛みはじめた。私の云ふ事が聴きとれなかつたのである。私は前より大きな聲で問

ひを繰り返した。

「村？…それは何の用で？」

「ほかでもないが、雨宿りがしたいのだ。」

「なんだね？」

「雨宿りがしたいのさ。」

「あゝ！（老人は日にやけた頸筋を搔いた。）なら、お前さん、その、かう行きんされ。」と他愛なく両手を振りながら、急にかう云ひ出した。「それ…その、林について行きんされ——暫らく行つてると——すぐに道い出るが、その道に構はんと、のべつ右へ右へ、右へ右へと行きんされ：やがて、そこがもうアナニエヲ村だ。でなけりや、シートフカへも出られるがね。」

私には老人の言葉が容易に聞きとれなかつた。口髭が邪魔をする上に、舌がよく云ふことを聞かなかつたのである。

「一體お前はどこの者だい？」と私は訊ねた。

「なんだね？」

「お前はどこの者かつて訊いてゐるんだよ。」

「アナニエヲのもんだ。」

「此處で何をしてゐるんだね？」

「なにい？」

「此處で何をしてゐるのだよ？」

「番してゐるよ。」



「でも、何の番をしてゐるんだね？」  
「豌豆のよ。」

私は噴き出さずにはゐられなかつた。

「へーえ、とんでもない話だ。——年はいくつだね？」

「そんなこと誰が知るもんで。」

「どうやら、お前は眼が薄いやうだね？」

「なにい？」

「眼が薄いやうだね、つてことさ。」

「うん。それから耳もさつぱり聞こえねえことがあるよ。」

「ぢや、お前に番人が出来るわけがないぢやないか、とんでもない！」

「そんな事あ、目上の人の知つたことだよ。」

『目上の人！』と私は考へ、そゞろ哀れを催しながら、不幸な老人を眺めた。彼は手探りで、懐からこち／＼になつた麵麩の切れはしを取り出し、それでなくとも落ちこんだ頬をしきりに窪ませながら、子供のやうにしゃぶり始めた。

私は老人の教へてくれた通り、林の方へ足をむけ、右へ曲がつて、それからずつと右へ右へととり、遂にとある大村まで辿りついた。村には新式の、といつてつまり、圓柱を竝らべた石造りの教會と、同じく圓柱つきのひろ／＼とした地主邸とがあつた。まだ大分手前から、細かい網のやうな雨を透かして、葎葎の二本煙突のある小家が見えた。それはほかの家よりも一段高く、察するところ、百姓頭の住居らしかつた。私はこゝならサモワールも、お茶も、砂糖も、餘り酸つ

ぱくないクリームにもありつける事と思つて、そちらの方へ足を向けた。寒さうに慄へる犬を連れて、私は入り口の階段を上がり、玄關へ通つて、扉を開けた。けれど、そこには普通田舎家になりふれた調度類はなくて、私の眼に入つたのは、書類を堆高く積み上げた幾つかのテーブルと、赤い二つの戸棚と、しみだらけになつたインク壺と、重さ一ブードもありさうな錫の吸取砂入れと、恐ろしく長い鷲ペンなどであつた。一つの卓の上には、脹れぼつたい病人くさい顔をした、眼の小さい、額の脂ぎつた、もみ上げの矢鱈に長い、はたちぐらゐの若者が腰をかけてゐた。型の如く、鼠色の南京木綿の長上衣を着て、胸や腹のあたりをてら／＼に光らしてゐる。

「なんの御用で？」思ひがけなく、鼻面を擱まへられた馬のやうに、ぐいと頭を高く反らし乍ら、若者は問ひかけた。

「こゝは番頭さんの住居ですか……それとも……」

「こゝは當家の第一事務所です。」と、彼は私の言葉を遮つた。「で、私はいま當番になつて居りました……あなた看板をごらんになりませんか？ そのために、看板が打ちつけてあるんですか。」

「どこか、着物をかわかすところは無いでせうか？ この村に、サモワールのある家はないかしらん？」

「サモワールがなくてどうします。」鼠色の長上衣を着た若者は、勿體らしく云ひ返した。「チモフェイ長老の所なり、ナザール・タラスイチの所なり、小鳥番のアグラフェーナの所なり、おいでになつたらいゝでせう。」

「お前いつたい誰と喋つてるんだ、この間抜け野郎？ 眠られんぢやないか、間抜けめ！」と云



ふ聲が隣りの部屋から聞こえた。  
「なにね、誰か知らない旦那が見えて、どこか着物を乾かす所はないか、と訊ねていらつしやるので。」

「どんな旦那だい？」

「分かりませんよ。犬と鐵砲を持つた方で。」

隣りの部屋で寢臺の軋む音がした。と、ドアが開いて、年のころ五十ばかりの、肥つた背の低い男が入つて來た。牡牛のやうな頸をして、眼がぎよろりと飛び出し、頬が恐ろしく圓く、顔中てらてら光つてゐる。

「なに御用で？」と男は私に問ひかけた。

「着物を乾かしたいと思つて。」

「こゝはそんな事をする所ぢやありませんて。」

「こゝが事務所だといふ事は知らなかつたんだが、でも、なんなら實費は拂つても……」

「そりやなに、こゝだつて出來ない事ありませんよ。」と肥つちよは答へた。「まあ、こちららへお入りになりませんか？」から云つて、私を次の間へ案内したが、自分が出て來たのは別の部屋である。「こゝでは如何でせう？」

「結構……ところで、クリーム入りのお茶が貰へないかしら？」

「畏りました、たゞ今。暫らくお召し更へでもして、お休みなすつて下さいませんか、その間にお茶はすぐ出來ますから。」

「ときに、これは誰の領地なんだらう？」

「ロスニャコーヴ夫人、エレーナ・ニコラエヴナの御領地で。」

男は出て行つた。私はあたりを見廻した。この部屋と事務所を隔ててゐる仕切り壁に沿うて、大きな革張りの長椅子が据ゑてあり、往來へ向いた一つきりの窓の兩側には、背の無闇に高い同じく革張りの椅子が二つ置いてあつた。薔薇の花模様のある緑色の壁紙を張つた壁には、大きな油繪の額が三枚かゝつてゐる。一枚には水色の頸輪を嵌めたセッター種の犬が描いてあつて、『これぞ我が慰樂』と題銘がしてある。犬の足もとには川が流れてゐて、川の向かう岸の松の下には、並みはづれて大きな兎が片耳立てて蹲まつてゐる。次の繪には二人の老人が西瓜を食べてゐて、西瓜のかけから『満足の殿堂』と彫り付けられた希臘風の柱廊が遙かに遠く見えてゐる。三枚目の繪には、赤い膝頭に恐ろしく太い踵をした半裸體の女が、足を縮めたポーズで横になつてゐる處が描かれてゐる。私の犬はいきなり一生懸命に骨を折つて長椅子の下へ潜り込んだが、其處は埃がひどかつたと見えて、矢鱈にくしやみをした。私は窓の傍へ行つて見た。地主郎から事務所まで、通りを横切つて斜に板が敷いてある。それはまことに當を得た所置で、その邊は一體にこの地方特有の黒土の地盤で、おまけに長雨が降り續いたために、恐ろしいぬかるみになつてゐたからである。通りに背を向けてゐる地主郎の周りでは、普通の地主郎の附近で見られるやうな光景が展開されてゐた。色の褪めた更紗の着物をきた女中どもがあちこちしてゐるし、下男たちは泥濘の中をえつちらおつちら歩いては、とき／＼立ち止まつて、思案顔に背中を搔いてゐる。その邊に繋がれた小がしらの馬は大儀さうに尾を振つて、鼻面を高くさし上げながら板塀を噛つてゐる。雌雞はこつ／＼と鳴き立て、肺病やみのやうな七面鳥どもは絶えず呼び交はしてゐた。風呂場とも思しい、薄暗い腐れかゝつた家の入り口階段には、頑丈らしい若者がギターを持



つて腰を下ろし、幾らか勇み肌の調子で、誰でも知つてゐる小歌を唄つてみた。

えゝゝ住みなれし里を離れて  
わたしや荒野に身を捨てる

肥つちよが私の部屋へ引つ返して来た。

「さあ、お茶を持つて参りました。」と、氣持のいい微笑を浮かべながら云つた。

事務所の當番をしてゐる鼠色の長上衣を着た若者が、古ぼけた骨牌卓の上にサモワールと、急須と、缺けた受け皿に載せられたコップと、クリームの壺と、石のやうな堅い環形麵包の束を並らべた。肥つちよは出て行つた。

「あれはなんだね、」と私は番頭に訊ねた。「番頭かい？」

「いゝえ、違ひます。もとは會計の主任でしたが、今度、事務所の主任に昇進しましたので。」

「この、村には番頭といふものがゐるのかね？」

「えゝ、居りません。支配人のミハイロ・ギクローフといふのがゐるだけで、番頭は居りませんです。」

「では、管理人はゐるかね？」

「そりや居りますとも。リンダマンドルといふ獨逸人で、名前はカルロ・カルルイチと申します

——でも、これは別に切り盛りを致しません。」

「では、誰が切り盛りをするんだらう？」

「奥様が御自分で。」

「へえ……ところで、この事務所には人が大勢ゐるのかしら？」

「若者は考へ込んで、

「六人をりませす。」

「誰と誰だね？」と私は訊ねた。

「それはかうです——先づ筆頭が會計主任のワシーリイ・ニコラエギツチで、それから事務員のピョートル、ピョートルの弟のイワン、これも事務員、もう一人のイワン、これも同様に事務員ですし、コスチンキン・ナルキーゾフ、同じく事務員、それからこの私——まあ、一々數へ切れませんよ。」

「きつとこちらの奥さんは召使ひを大勢かゝへていらつしやるだらうね。」

「いえ、大勢といふ程でもござんせん……」

「それにしても、どれくらゐだね。」

「さやう、百五十人くらゐにはなるでせうかな。」

「私たちは二人とも暫らく黙つてゐた。」

「さてと、どうだらう、君は書く方は達者かね？」と私はまた話の撚りを戻した。

「若者は顔ぢゆう笑み綻ばして、一つ頷き、事務所の方へ行つて、細かく書きつめた紙切れを持つて来た。

「これが私の書いたものです。」相變はらずにく／＼しながら、彼は云つた。

見ると、灰色の紙を四つ切りにしたものに、綺麗なよくのびた手で次のやうに書いてあつた。



## 命令

アナニエヲ邸第一事務所ヨリ支配人ミハイロ・ギクローフ宛、第二〇九號。

本命令受領ト同時ニ左ノ件ノ調査ヲ命ズ、昨夜酩酊ノ上猥雑ナル俗歌ヲ歌ヒ、英吉利庭園ニ侵入シテ、佛蘭西人家庭教師アンジェニー夫人ノ安眠ヲ妨害シタルハ何者ナリヤ、當夜庭園ノ守衛ハ何人ガソノ衝ニ當リ、迂濶ニモカ、ル不規律ヲ見遁シタルカ、右ノ件ニツキ詳細取調べノ上即時事務所ニ報告方ヲ命ズ。

事務所長 ニコライ・フヴォストフ

この命令書には『アナニエヲ邸第一事務所之印』といふ大きな定紋入りの印章が捺してあつて、下には『精確ニ履行ノ事、エレーナ・ロスニャコーヴ』と添へ書きがしてある。

「これは奥さんが自分で書き添へなすつたのかね？」と私は訊ねた。

「そりやさうですとも。いつも御自分で筆をお入れになります。これがないと、命令が有効にならないので。」

「は、あ、では何かね、この命令を支配人に送りつけるのかね？」

「い、え、向かうから自分でやつて来て、讀みますので。といふより、こちらで讀んで聞かしてやるのです。實はこゝの支配人は字を知りませんのでね。」（當番はまたちよつと黙り込んだ。）「とき、如何でございませう、」と彼は薄笑ひをしながら云ひ足した。「よく書いて居りませうがな？」

「よく書けてる。」

「實を申しますと、文章を作つたのは私ぢやござんせん。この方はコスチンキンが名人なんでし

て。」

「え？……こゝの命令は、初め草稿を作るのかね？」

「でなくて、どう致しませう？ いきなり打つつけには書けませんよ。」

「君はいくら給料を貰つてる？」と私は訊ねた。

「三十五ルーブリと、別に靴代を五ルーブリ頂きます。」

「それで君は不足ないかね？」

「そりや、不足なんかございせんとも。——何しろ、誰でも事務所へ入れるといふわけにはありませんからね。私などは、正直なところ、神様のお蔭なんでして、叔父貴が従僕頭を勤めて居りますのでね。」

「それで、君は萬事いゝと思つてゐる？」

「そりやさうですとも。だが、打ち明けて申しますとね、」と彼は溜め息をつきながら、言葉を續けた。「例へば、あきんどなどの所で勤めますと、同じ我々仲間でも割りがよろしいので。商人の所にある連中は、とても割りがよろしうございます。現に、昨日もヴェネフから商人が一人まゐりまして、そのお伴について來た男の話を聞きました。結構なもんですな、まつたくもう結構なもんで。」

「ぢや、なにかね、商人の方が餘計に給金を出すのね？」

「とんでもない！ あきんどの所に奉公して給金なんかねだつたら、早速お拂ひ箱になつてしまひますさあ。いや、商人の所へ住み込む以上、一か八かで行かなくちや駄目ですよ。さうすれば、食べさせて、飲まして、着せてくれる。すべてがかういつた調子ですよ。もしお氣に入れば、も



つとよくもしてくれませう……給金なんか！ そんなものはまるで要らないくらいですが……それに、商人はわれ／＼仲間と同じやうに、露西亞風に、ざつくばらんの暮らし方をしてゐますから、一緒に旅先きへ出ましても、主人が茶を飲めばこちらも飲む、主人が食べればこちらも食べる、といふ風でしてな。あきんどと來たら……そりや比べものになりませんや。商人は旦那方と違つて、氣紛れを起こすやうな事もなく、まあ腹を立てたつて、一つ二つぶん撲れば、もうそれでおしまひですからね。いつまでもくどくどごとを云つたり、ちく／＼皮肉を云つたりなんかしやあしません……ところが、旦那がたを相手にすると、それこそ災難でさあ！ 何をしてもお氣に召さないで、あれもいけない、これも嫌ぢやと御意あそばす。水をコップに入れて持つて行つたり、お料理をさし上げたりすると『あゝ、この水は臭い！ あゝ、この料理は厭な匂ひがする！』と云はれるので、それを下げて、暫らく扉の外に立つてゐて、また同じものをさし出すと、『いや、まあ、これならよろしい、いやまあ、今度は臭くない。』といふ始末ですよ。それから、ざつくばらんに申しますが、奥様がたと來たら、いやはや誠に困つたもので……それから又お嬢様がた……！

「フューヂュシカ！」といふ肥つちよの聲が事務所の方から聞こえた。

當番は素早く出て行つた。私は一杯のお茶を飲み干して長椅子の上に横になると、すぐに寢入つてしまつた。私は二時間ばかり寢た。

眼が覺めてから、起き上がらうと思つたけれど、億劫で堪らないので、私は眼を塞いだ。然し、今さら二度寢も出來ない。仕切りの向かうの事務所ではひそ／＼と話す聲が聞こえる。私は何氣なしに耳をすました。

「なるほど、なるほど、ニコライ・エレメーキッチ」と一人の聲が云ふ。「なるほど、そいつは勘定に入れないわけにはいきませんな。たしかに行きませんよ。……ふむ！」話し手は咳拂ひをし

た。「もうこのわしを信用して貰ひたいもんで、ガヴリーラ・アントーヌイチ、先ほどの肥つちよが云ひ返した。「このわしがこゝのしきたりを知らなくてどうするもんかね。まあ、考へてもおくん

なさい。」

「そりやさうとも、ニコライ・エレメーキッチ、あんたは此處ぢや、いはば第一に指を折られる人だからな。さあ、それでどうしたもんだらう？」と聞き覚えのない聲が云ひつゞける。「どう決着をつけたもんでせう、ニコライ・エレメーキッチ？——一つ伺ひたいもんで。」

「どう決着をつけるかつて、ガヴリーラ・アントーヌイチ？ このことは、云つてみりや、あんた次第でどうにでもなる事なんだが、あんたはどうやら氣乗りがしない様子ですな。」

「減相な、ニコライ・エレメーキッチ、なにを仰つしやる？ なんせ、わつしらは商賣人のことだから賣りかひするのが仕事でさ。云はば、それで立つてるんですよ。ニコライ・エレメーキッチ。」

「ぢや、一布度八ルーブリだ。」と肥つちよは、ゆつくり間をおきながら云つた。

溜め息の聲が聞こえた。

「ニコライ・エレメーキッチ、そりやあんまり張り過ぎるぢやごわせんか？」

「ガヴリーラ・アントーヌイチ、それより外にや仕方がねえ。神様の前へ出たつもりで誓つて云ふが、どうにも仕方がねえんで。」



沈黙が襲つた。

私はそつと身を起こして、仕切りの隙間から覗いて見た。肥つちよはこちらへ背をむけて、坐つてゐる。それと向かひ合つて、年の頃四十ばかりの瘦せぎすで、色の悪い、精進油でも塗つたなやう顔をした商人が腰かけてゐる。商人はのべつ鬚をびく／＼させ、せわしきさうに瞬きしては唇をひつ吊らせてゐる。

「今年の出来榮えは、いやはや、素晴らしいもんですな。」と彼はまた云ひ出した。「私はこちらへ来る途中も、ずつと見惚れて居りましたよ。ヴォーロネシュからこの邊一帶、素晴らしい出来で、一等物と云つてもいゝくらゐでさ。」

「全く出来は悪くないよ。」事務所頭は答へた。「しかし、ガヴリーラ・アントーヌイチ、お前さんも知つての通り、秋の蒔きつけ春次第つていふ事があるからね。」

「そりや、全くその通りで、ニコライ・エレメーキッチ、なにごととも神様の思召し次第でございますよ。そりや仰つしやる通りに違ひありませんで……ときに、どうやらお客様がお眼覚めのご様子ですな。」

肥つちよは振り返つて……聞き耳を立てた……

「いや、眠つてござる。尤も、ちよつとなにして見るかな……」

彼は戸の傍に寄つて來た。

「やつぱり眠つてる。」ともう一度いつて、もとの席へ引つ返した。「さあ、それでどうなんです、ニコライ・エレメーキッチ？」とまた商人が切り出した。「とにかく取引きの方を片付けなくちや……なら、仰つしやる通りにしませうよ、ニコライ・エレメーキ

ツチ。仰つしやる通りにしませう。」と、のべつ眼をばちつかせながら、言葉を續けた。「鼠色紙幣二枚と白紙幣一枚をあなた納めて頂いて、あちらの方へは（と地主郎の方を顎でしやくり）、一布度六ルーブリ半といふ事にしませう。それで手打ちにして頂けますかね？」

「鼠色紙幣四枚だ。」と事務所頭は答へた。

「では、三枚！」

「白紙幣ぬきの鼠色四枚だ。」

「三枚ですよ、ニコライ・エレメーキッチ。」

「三枚半、もうそれより一コペイカも負けられない。」

「三枚ですよ、ニコライ・エレメーキッチ。」

「もう無駄を云はんといつて貰はう、ガヴリーラ・アントーヌイチ。」

「なんといふ話の分からん人だらう。」と商人は呟いた。「それぢや、いつそぢき／＼奥様と話をつける事にしよう。」

「どうなと勝手にしなさい。」と肥つちよは答へた。「初めつからさうすりや好かつたのさ。本當に何も餘計な心配をしなくて済むわけだからな……その方がずつと慥巧だ！」

「まあ、ニコライ・エレメーキッチ、澤山ですよ、澤山ですよ。もうさつそく腹を立てちまつて！ あれはちよつと云つて見ただけで。」

「いや、なに、全くのところ……」

「もう止しなさい、と云ふのに……冗談だつて云つてるぢやないか。さあ、取つて貰はう。三枚半だ。お前さんにかゝつちや仕様がなない。」



「四枚貰ふのが当たり前なのに、こつちが馬鹿なもんだからつい急いでしまつて。」と、肥つちよは呟いた。

「ほら、あちらのお邸の方へは六ルーブリ半でいゝんだね、ニコライ・エレメーキッチ。——六ルーブリ半で麥は渡して貰へるね？」

「六ルーブリ半さ、ちやんとさう云つたぢやないか。」

「さあ、それぢや手打ちだ、ニコライ・エレメーキッチ（商人は指を擴げた手で事務所頭の手のひらを打つた。）ぢや、御機嫌よう！（商人は立ち上がった。）では、ニコライ・エレメーキッチ、わつしはこれから奥様のところへ行つて、お取次ぎを頼んだ上、ニコライ・エレメーキッチが六ルーブリ半とお決めにになりました、とさう申し上げるからね。」

「さう申し上げるがいゝ、ガヴリーラ・アントーヌイチ。」

「なら、受け取つて貰ひませう。」

商人は餘り厚くない札束を事務所頭に手渡して、一つお辭儀をすると、頭を振つて二本指で帽子をつまみ、肩を振り、全身をくねらして、いつぱしお上品に長靴をぎゆう／＼云はせながら出て行つた。ニコライ・エレメーキッチは壁際へ行つて、私の睨んだところでは、商人から受けつた札を檢め出したらしい。その戸の蔭から、濃い頬髯を生やした赫毛の頭が覗いた。

「えゝ、どうだね？」と頭が訊ねた。「萬事型通りに行つたね？」

「萬事型通りさ。」

「いくら？」

肥つちよは忌々しさうに片手を振つて、私のゐる部屋を指さした。

「はゝあ、よろしい！」と頭は答へて、そのまま引つ込んだ。肥つちよは卓の傍へ行つて腰を下ろし、帳簿を擴げ、算盤を取り出し、珠を右へやつたり左へやつたりし始めた。が、それには人差し指でなく中指を使つた。その方が豪さうに見えるからで。

當番が入つて來た。

「貴様、何用だ？」

「ゴロブリーキからシードルが參りました。」

「あゝさうか！ ぢや、こゝへ呼んでくれ、ちよつと待つた、待つた……その前に隣りへ行つて、よその旦那がまだ寢んで居られるか、それともお眼覺めになつたか、見てこい。」

當番はそつと私の部屋へ入つて來た。私は枕代はりの獲物袋に頭をのせて、眼をつむつた。

「お寢みですよ。」當番は事務所に引返してひそ／＼聲で云つた。

「ぢや、シードルを呼んでくれ。」彼は到頭かう云つた。

私は再び身を起こした。背の高い三十がらみの、頑丈らしい百姓が入つて來た。赤い頬つべたをして、髪は亞麻色、短い縮れた頸鬚を生やしてゐる。先づ聖像にお祈りをして、事務所頭にお辭儀をし、帽子を兩手に持つて、腰をのばした。

「今日は、シードル。」と肥つちよは算盤をぱら／＼やりながら云つた。

「御機嫌よろしう、ニコライ・エレメーキッチ。」

「ところで、どうだね、道の具合は？」

「そんなに悪くもねえですよ、ニコライ・エレメーキッチ。いくらか泥濘つてをりますがね。」（この百姓はゆつくりと、餘り高くない聲で物を云つた。）



「内儀さんはまめかね？」  
「そりや丈夫ですとも！」

百姓は溜め息をついて、片足を前へ出した。ニコライ・エレメーキッチは驚ペンを耳に挟んで鼻をかんだ。

「さて、何の用事で来たんだい？」格子縞のハンカチをポケットへしまひながら、質問を続ける。

「實は、ニコライ・エレメーキッチ、わしどもの方から大工を寄越せちふ仰つしやりつけなので。」

「なに、それがどうしたのだ。それとも、お前の方に大工がをらんとでも云ふのかね？」

「大工がゐねえちふ筈はござえせんよ、ニコライ・エレメーキッチ。わしどもの所は森ばかりの土地だから——そりや當たりめえでさあね。たゞなんせ忙がしい時だもんで、ニコライ・エレメーキッチ。」

「忙がしい時だつて！なるほど、お前たちはよその仕事ばかりしたがつて、自分の御主人のために働くのは嫌ひなんだらう……どつちにしたつて同じぢやないか！」

「仕事はどちらにしても變はりはござえせん、ニコライ・エレメーキッチ。そりや、たしかにその通りで……でも、なんでして……」

「それで？」

「賃金がまことに……その……」

「今さら珍らしくもない話だ！ちよつ、すつかり増長しやがつて。なんてざまだ。」

「それに、もう一つ云はして頂きますと、ニコライ・エレメーキッチ、仕事はやつと一週間分しかねえのに、まる一と月も引つ張られるんですからね。やれ材料が足りなくなつただの、やれ庭へ行つて徑を掃除しろのつて。」

「そりや今に始まつたこつちやねえ！奥様が御自分で云ひつけなさる事だから、俺やお前なんか文句を云ふべき筋ぢやないんだ。」

シードルは口を噤んで足を踏み代へ、踏み代へしだした。

ニコライ・エレメーキッチは首を横にかしげて、せつせと算盤を弾き出した。

「村の……百姓どもが……ニコライ・エレメーキッチ……」とシードルが一言一言で吃りながら、たうとう口を切つた。「あなた様によく申しましてな……實はそれで……その……（彼は大きな手を外套の内懐へつゝ込み、そこから赤い刺繡模様のある麻の切れをくるく／＼巻いたのを取り出しにかゝつた。）」

「何するんだ、なにするんだ、この馬鹿が。氣でも狂つたのか？」と肥つちよは慌てて遮つた。

「さあ、さあ、俺の家へ行つてなさい。」と、呆氣にとられてゐる百姓を、殆ど押し出さんばかりにして、言葉を續けた。「あつちで家内に頼むがい……茶でも出すだらうよ。俺は後からすぐに行くから、先きに行つてなさい。まあ、いゝから、行つてろつてことよ。」

シードルは出て行つた。

「仕様のない……熊男だ！」と、事務所頭は後ろから投げつけるやうに呟いて、頭を振り、また算盤に齧りついた。

不意におもての方から、「クープリャー！クープリャー！クープリャーは、どうしても押し倒せね



え！』といふ喚き聲が聞こえ、更に入口の階段でも響いた。暫らくたつと、見たところ肺病やみらしい、背の低い男が事務所へ入つて来た。竝み外れて長い鼻をして、大きな眼をちつと据ゑたまま、恐ろしく得意さうに氣取つた様子をしてゐる。男は綿天鷲絨の襟をつけ、ごく小さな釦をかけたアデライド色——私たちの方の言葉に従へば、一名オドロイド色の古い破れた上着をきてゐる。肩には一束の薪を背負つてゐるのであつた。その周りには五六人の下男が集まつて、口々に「クーブリヤ！ クーブリヤを押し倒すわけにや行かねえ！ クーブリヤが煖爐焚きに出世した、煖爐焚きに出世した！」けれど、綿天鷲絨の襟のついた上着の男は、仲間の大騒ぎを見向きもせず、顔色一つ變へなかつた。彼は足取り正しく、煖爐の傍まで行つて、擔いでゐた荷物を抛り出し、腰をのばして、後ろのポケットから煙草入れを取り出し、眼を剥き出しながら、灰の混つた金花菜（煙草代用草）を鼻につめ始めた。

この騒々しい一隊が入つて来たとき、肥つちよは眉をひそめて、腰を持ち上げたが、なる程と合點が行くと、にたり笑つて、たゞ、隣りの部屋に獵をする人が寝んでいらつしやるから、大きな聲をしちやいけない、と云つたばかりである。『獵をする人つて誰だね？』と二人ばかりの男が一齊に訊ねた。

「地主様だ。」

「へえ！」

「勝手に睡がして置くがい。」と綿天鷲絨の襟をした男は両手をひろげながら口を切つた。「こつちの知つたこつちやねえ！ たゞ、俺に構つて貰はなけりやいよ。俺あ煖爐焚きに出世したんだからな……」

「煖爐焚きに！ 煖爐焚きに！」と一同は面白さうに難し立てた。

「奥様のお云ひつけぢやねえか。」と彼は肩を疎めて言葉を續けた。「まあ待つてゐるがい……いまにおめえらは豚飼ひにされるから。だが、俺は仕立職で、しかも腕のいい仕立職で、モスクワ一流の親方に仕込んで貰つて、將軍様の服まで縫つたもんだぞ……こればかりは取り上げようたつて取り上げられるもんぢやねえ。おめえらなんぞ、一體、何をえらさうに云つてゐるんだ？ ……なにをよ？ この穀つぶしめ、のらくら者め。それだけの値打ちしかありやしねえ。俺なんかこゝをお拂ひ箱になつたつて、餓ゑ死にもしなけりや、のたれ死にもしやしねえ。俺に旅行免状を持たしてみろ——立派に年貢を納めて、奥様がたを感心させて見せるから。ところが、おめえらはどうだ？ のたれ死にだ、蠅みてえに、のたれ死にするに決まつてらあ、それくらゐが落ちだあ！」

「よくも吐いたな、赤いネクタイを締めて、兩臂の破れた着物をきた、あばた面で、眉や睫毛の白い若い衆が口を入れた。「てめえなんか現在旅行免状を貰つて行つたくせに、奥様がたにやたゞの一コペイカも年貢をお目にかけてた事もねえし、鏝一文身錢も残さねえでよ、やつとこきで草臥れ足を引き摺つて歸つたぢやねえか。それからといふもの、いつも年がら年中ぼろ服一枚の着たきりすずめだあ。」

「だつて、仕方がねえよ、コンスタンチン・ナルキーズイチ！」とクーブリヤンは云ひ返した。「人間は女にまゐつたが最後、もう駄目だ。一生はふいだ。おめえ、先づ俺のやつて来ただけの事をしてみ、それから後で人の事をかれこれ云ふがいよ、コンスタンチン・ナルキーズイチ。」

「女にまゐつたなんて、一體どんな相手を見つけたんだ！ それこそ化物みてえな奴だらうよ！」



「いんや、そんなことを云ふもんぢやねえ、コンスタンチン・ナルキーズイチ。」  
 「誰が本當にするものか？ だつて、俺はあの女を見たんぢやないか。去年、モスクワでちゃん  
 とこの眼で見たんだぜ。」

「去年は、なるほど、あれもちつとばかり縹緞きりやうを落としてゐたつげが。」とクプリヤンが云つた。  
 「だが、みな衆、かうしたらどうだね。」と一人の男が馬鹿にしたやうな、いけぞんざいな聲で  
 云ひ出した。背が高く、瘦せぎすで、にきびだらけの顔をした男で、髪に鍔を當てて、油を  
 かけてかつかけてゐるところを見ると、確か従僕に違ひない。「一つクプリヤン・アフナーシーチに  
 例の歌を唄つて貰はうぢやないか。さあ、始めた、クプリヤン・アフナーシーチ！」

「さうだ、さうだ！」とほかの連中も相槌を打つた。「アレクサンドラには嵌まり役だ！ クー  
 リヤには持つて来いだ、申分がねえ。さあ歌つたり、クープリヤン……アレクサンドラ、旨い  
 ぞ！（邸の下男たちは男のことを云ふ場合にも、一段と優しみを添へるために、女性の語尾を  
 遣ふのが始終なのである。）さあ、歌つた！」

「こゝは唄なんか歌ふ場所とちがふよ。」とクプリヤンはきつぱりはねつけた。「こゝはお邸の事  
 務所だ。」

「なにもおめえの知つたことぢやありやしねえ！ はゝあ、讀めた、てめえが事務員にでもなら  
 うと狙つてゐるんだな。」コンスタンチンは、がさつな笑ひ聲を立てながら答へた。「きつと、さう  
 だ！」

「萬事御主人様のお心にある事だ。」と可哀さうな男は云つた。

「さうだ、さうだ、とんでもねえ事を企らんでゐやがる。ちえ、なんて野郎だ？ うわい！ う

わい！」

一同はどつとばかり笑ひ崩れた。中にはびよん／＼飛び上がる者もあつた。誰より一番大きな  
 聲で囃し立てたのは、十五ばかりの男の子である。察するところ、召使ひ仲間では頭株の悴らし  
 く、青銅の釦のついたチョッキを着込み、薄紫のネクタイをしめて、もう小さいなりにいつぱし  
 腹を突き出してゐる。

「おい、本當の事を聞かしてくれんか、クーブリヤ、」見受けたところ、すつかり面白くなつて、  
 氣が優しくなつたらしいニコライ・エレメーキツチが、満足らしい調子で口を入れた。

「なあ、煖爐焚きは厭だらうな？ 定めし詰らん仕事だらうな？」

「何を云はつしやる、ニコライ・エレメーキツチ、」とクプリヤンが云ひ出した。「なるほど、今  
 ぢやお前さんは邸の事務所の頭をしてゐなさる。全く、それは確かに間違ひのねえこつたが、お  
 前さんだつて、いつか御前をしくじつて、百姓小舎で暮らした事もあるぢやねえか。」

「おい、氣をつけろ、俺を誰だか忘れちやいかんぞ。」と肥つちよは疝性に遮つた。「ひとがてめ  
 えのやうな馬鹿に冗談口の一つもきいてやつてゐるんだから、よくまあ、こんな馬鹿を相手にし  
 て下さると思つて、しんから有難がるのが本當ぢやねえか、この阿呆め。」

「つい、口がすべつたんで、ニコライ・エレメーキツチ、かんべんしておくんなさい……」

「ふむ、さうだらうよ、口がすべつたんだらうよ。」

戸が開いて、小童こどもが駈け込んだ。

「ニコライ・エレメーキツチ、奥様のお召しですよ。」

「奥様のところに誰が来てゐるんだ？」と彼はこわつぱに問ひ返した。



「アクシーニヤ・ニキーチシナとヴェネフの商人で。」  
 「たゞ今すぐに參じますと申し上げる。それから皆のもの、」と抑へつけるやうな口調で續けた。「お前たちは新米の煖爐焚きを連れて、とつとこゝを引上げた方が好からうぜ。萬が一、獨逸人が來かゝつたら、それこそ云ひつけられるぞ。」

肥つちよは頭の毛を撫でて、上着の袖に殆どかくしてゐる手で口を蓋しながら、咳拂ひをする  
 と卸をきちんとかけ、足を大きく踏み擡げて、奥様のところへ出かけて行つた。暫らくするとわ  
 いわい連もクブリヤンと一緒に、その後からぞろ／＼ついて行つた。後に残つたのは古馴染みの  
 當番一人きりであつた。當番はペンを削りにかゝつたが、そのまゝ居眠りを始めた。幾匹かの蠅  
 が早速待つてゐましたとばかりに、その口の周りにたかつた。蚊が一匹額に止まつて、足を行儀  
 よく擡げ、その柔かな肉にゆつくりと針をさし込んだ。先程の頬髯を生やした赤毛の頭がまた戸  
 口に現はれてしきりに様子を窺つてゐたが、やがてかなり醜い身體もろとも、事務所の中へ入つ  
 て來た。

「フェーヂシカ！ おいフェーヂシカ！ 年中寝てばかりゐやがつて！」と頭が云つた。  
 當番は眼を開けて、椅子から立ち上がった。

「ニコライ・エレメーキッチは奥さんところへ行つたのかね？」

「奥さんのところだよ、ワシーリイ・ニコラーキッチ。」

『はゝあ！ 成る程！』と私は考へた。『これがさうだな——會計主任は。』

會計主任は部屋の中を歩き出した。尤も、歩くと云ふよりも寧ろ忍び足で、全體の様子が猫に  
 似てゐた。裾の馬鹿に狭い、古ぼけた黒い燕尾服が、背中の上でたぶ／＼してゐる。彼は片手

を胸にあて、窮屈さうに盛り上がつてゐる馬の毛のネクタイを片手でべつ弄つては、しきりに  
 首を振つてゐる。音のしない山羊皮の長靴を穿いて、そつともの柔かに足を運ぶ。

「けふ、地主のヤクーシキンさんがあなたを訪ねて見えましたよ。」と當番が云ひ添へた。

「ふむ、訪ねて來た？ どんな事を云つてゐた？」

「なんでも今晚チュチュレフへ行つて、あなたをお待ちしてゐると云ふ事でした。ワシーリイ・  
 ニコラーキッチに話があるとの事でしたけれど、どんな話か、それは仰しやいませでした。ワ  
 シーリイ・ニコラーキッチがちゃんと御承知だとかつて。」

「ふむ！」と會計主任は答へて、窓の傍へ近よつた。

「どうだ、ニコライ・エレメーキッチは事務所かね？」と大聲に呼ぶ聲が玄關から聞こえた。と  
 思ふと、背の高い怒つたらしい様子をした男が鬨を跨いで入つて來た。道具は整つてゐないけれ  
 ど、表情のある元氣のいゝ顔つきで、かなり小ざつぱりした服装をしてゐる。

「こゝにやゐないのかい？」ちらとあたりを見廻して男は訊ねた。

「ニコライ・エレメーキッチは奥様のところだ。」と會計主任は答へた。「いつたい何用だね、わ  
 しは聞いて置かう、パーゼル・アンドレーキッチ、わしに話したらいいだらう……お前さん、ど  
 んな用だね？」

「どんな用かつて？ わしがどんな用で來たか、それをお前さん知りたのかね？（會計主任は  
 痛ましさうに頷いた。）俺あ彼奴を懲らしめてやりたいのだ。あの碌でなしの布袋腹め、忌々し  
 い告げ口野郎……俺あ彼奴に思ひ知らせてやるんだ！」

パーゼルはどつかと椅子に腰を下ろした。



「なにを云ふんだ、何を云ふんだ、パーエル・アンドレーキッチ？ 氣を静めなさい……よくまあ恥づかしくない事だね？ お前さん、相手が誰か忘れちゃいけないよ、パーエル・アンドレーキッチ！」と會計主任はしどろもどろに云つた。

「相手が誰だつて？ 彼奴が事務所頭に取り立てられたからつて、なんで俺のかまつた事か！ ふん、とんでもない奴を取り立てたもんだ、云ふがものはねえよ！ それこそ本當に、云はば、山羊を菜園へ放してやつたやうなものよ！」

「澤山だ、澤山だ、パーエル・アンドレーキッチ、澤山だよ！ そんなことはよしなさい……なんて詰まらん事を！」

「ちよつ、狐のおこんさん、また尻つ尾をふり出したな……いゝや、彼奴を待つ事にしよう。」とパーエルは中つ腹で云つて、卓をどんと一つ叩いた。「や、そら彼奴が御入來だ。」と窓を見て云ひ足した。「噂をすれば影がさした。ようこそ！」（彼は立ち上がった。）

ニコライ・エレメーキッチは事務所へ入つて來た。さも満足さうに、満面を笑み輝かしてゐたが、パーエルの顔を見ると、少しもぢく／＼して來た。

「今日は、ニコライ・エレメーキッチ。」じり／＼と相手の傍へよつて行きながら、パーエルは意味あり氣に口を切つた。

事務所頭はなんにも返事をしなかつた。戸口に商人の顔が覗いた。

「どうして返事をして下さらないんですね？」とパーエルは言葉を續けた。「だが、止さう……止さう……」と云ひ足した。「こんな遣り方は本當ぢやない、怒鳴つたり悪口をついたりしたんぢや、なんにもならねえ。それより、お前さん、一層きれいに云つてくれないかね、ニコライ・

エレメーキッチ。なぜお前さんは私を目の敵にするんだね？ なぜ私を浮かぶ瀬のないやうにしたがるんだね？ さあ、聞かして貰はう、そのわけを聞かして貰はうよ。」

「こゝはお前さんとかれこれ云ふべき場所ぢやない。」流石に昂奮した様子で事務所頭は答へた。「それに、そんな場合でもないからね。たゞ正直なところ、たつた一つ不思議で堪らないのは、お前さんはどんなところから推して、わしがお前さんを浮かぶ瀬がないやうにするだの、目の敵にするだの、そんなことを決め込んだのだね？ 第一、わしがお前さんを目の敵にするわけなんかないぢやないか！ お前さんはわしの下で、この事務所に勤めてゐるわけでもないからね。」

「知れたことさ。」とパーエルは答へた。「この上そんな目にあつて堪るもんかね！ だが、なぜお前さんはしらを切るんだね、ニコライ・エレメーキッチ？……私の云ふことは分かつてゐる筈なんだが。」

「いや、分からねえ。」

「いゝや、分かつてる。」

「いや、神かけて分らないよ。」

「おまけに神様まで引き合ひに出すのかい！ まあ、かうなつたら仕方がない。一つおたづねするが、ねえ、お前さんは神様が怖くないのかい！ え、なんだつてお前さんは可哀さうな小娘に生きてる空もないやうな思ひをさせなさんだ？ 一體あれにどうして欲しいんだね？」

「お前さんは誰のことを云つてるんだね、パーエル・アンドレーキッチ？」と肥つちよはさも呆れたやうな調子で訊ねた。

「これは、これは！ 知らないと言つしやるのかね？ わつしやタチャーナのことを云つてるん



だよ。ちつたあ神罰も恐れるがいよ。——あれは全體なんの意味なんだね？ 恥を知らない。お前さんはれつきとした女房のある身で、子供衆はかれこれ俺くらゐの圖體をしてゐるんぢやないか。ところが、俺はほかぢやない……天下晴れて嫁に貰はうと云ふんだ。俺は作法通りにやつてるんだぜ。」

「それでわしのどこが悪いんだね、パーエル・アンドレーキッチ？ お前さん達が一緒にゐるのを奥様がお許しにならないんぢやないか。そりや御主人様の思召しなんだよ！ それにわしがなんのかゝはりがあるんだね？」

「お前さんがなんのかゝはりがあるかつて？ ぢや、お前さんはあの女中頭の鬼婆とぐるになつてゐなかつたのかい、え？ いらざる告げ口をしないと云ふのかい、おい！ 一つ聞かして貰はう、頼りない小娘にありつたけの濡衣を着せないとでも云ふのかね？ お前さんのお蔭であれば洗濯係りから皿洗ひにされたんぢやなかつたかね？ 打ん撲られたり、棒槌の着物なんか着せられたりしてゐるのも、お前さんのお蔭ぢやないんぢやうか？……恥ぢを知らない、恥ぢを。いゝ年をしてゐるくせに！ お前さんは今にも中風で参つちまふかも知れないんだぜ……それしたら、神様のお裁きを受けなくちやならないよ。」

「悪態をつきなさい、パーエル・アンドレーキッチ……せい／＼悪態をつくがいよ……それも長いことはないんだからな！」

「なんだと？ 俺を脅かす氣なのか？」と、こちらはむきになつて云ひ出した。「俺がてめえを怖がると思ふのか？ 憚りながら、へん、そんなのたあ相手が違はあ！ 何を怖がる事がある

るものか？……俺はどこへ行つたつて、食ひしろぐらゐは稼いでみせるよ。手前なんかとはわけがちがふからな！ 手前なんかこゝにへばりついて、こそ／＼告げ口をしたり、御主人のものをくすねたりするより能のねえ奴だ……」

「まあ、よくも／＼増長したものだ。」と、これも同じ様に勘忍の緒を切らして來た事務所頭は、相手の言葉を遮つた。「この助手めが、たかが醫者の助手風情で、やくざな敷醫者のくせに……云ふ事を聞いてりや、どんな偉いお方かと思はあ、ちよつ！」

「さうよ、醫者の助手風情よ。ところが、この助手がゐなかつたら、あなた様などは今時分、墓の中で腐つてた筈なんだ……なんだつて俺は、こんな野郎を、療治してやる氣になんかなくなつたんだらう。」と彼は齒を喰ひしぼりながら云ひ足した。

「てめえが俺を療治した？……なんの、手前は俺に毒を盛らうとしたんぢやないか、蘆薈を呑ませやがつたくせに。」と事務所頭は引き取つた。

「それがどうしたんだ、てめえにや蘆薈より外なんにも利く薬がなかつたんぢやねえか？」

「蘆薈は醫師法で差し止められてるんだぞ。」とニコライは云ひ續けた。「それどころか、こつちの方がてめえを訴へてやりてえくらゐだ……てめえは俺を殺そうとした——さうだとも！ でも、神様がそんな悪事をお通させにならなかつたのさ。」

「もういよよ、二人とももういよよ。」と會計主任が口を出しかけた……

「うるさい！」と事務所頭は怒鳴り續けた。「こいつは俺を盛り殺さうとしやがつたんだ！ お前、それが分からないのか？」

「そんな事はどうだつていよよ……なあ、ニコライ・エレメーキッチ、」とパーエルは自棄半分



の調子で云ひ出した。「最後にもう一ぺんお願いするが……これといふのも、手前がさしたわがだ——俺あもう我慢し切れなくなつたんだよ。だから、もう俺たち二人に構はないでくれ、いゝかい？ さもなけりや、ほんとに、どつちかが碌な目は見ないんだから。俺あ、手前のことを云つてるんだぞ！」

肥つちよは猛り立つた。

「俺は貴様なんか恐れはせんわい。」と彼は怒鳴り出した。「分かつたか、この青二才め！ 俺はな貴様の親父も懲らしめてやつて、高慢の鼻を折つたものだが——貴様にや、いゝ手本だ、氣をつけろ！」

「親父のことなんか云はないで貰はう、ニコライ・エレメーキツチ、二度と云つて貰ふまい！」

「こりやどうだ！ 貴様が俺の指圖をする氣かい？」

「云ふなつてば！」

「ところが、こつちのはのぼせるなつて云つてゐるんだ……たとへ貴様がどれだけ奥様の役に立つと自惚れてたつて、俺たち二人のうちどちらをお残しになるかといふ段になりや、貴様なんか、お氣の毒ながら置いちや貰へねえよ！ 目上の者に楯つくなんて、そんな事は誰にだつてさせやしないから、氣をつけるがいゝ！（パーゼルは怒りで全身を慄はしてゐた。）また小娘のタチャーナは身から出た錆さ……今に見ろ、まだくあれ位の事ぢやねえから！」

パーゼルは両手を振り上げて飛びかゝつた。事務所頭はどうとばかり床の上に倒れた。

「あいつを懲役にやれ、懲役に。」とニコライ・エレメーキツチは呻くやうに云つた……

この場の結末は今さら書き立てまい。それでなくても、私は讀者の優しい感情を傷めはしな

つたかと怖れてゐる位だから。

私はその日の中に家へ歸つた。一週間ばかり経つてから、話に聞くと、ロスニャコーヴ夫人はパーゼルもニコライも邸に残して、女中のタチャーナだけ他所へやつてしまつたさうである。恐らくこの女に用がなかつたのであらう。



私は競走馬車に乗つて、ある晩、たつた一人で獵から歸つてゐた。家まではまだ八露里許りあつた。足の早い私の秘藏の牝馬はとき／＼鼻を鳴らしたり、耳をひく／＼させたりしながら、埃つぽい道を元氣よく走つてゐた。疲れた犬はまるで縛りつけられたもののやうに、車の後輪から一歩も遅れずに走つてゐる。雷雨の氣配が迫つて來た。行く手の森かげから、大きな薄紫色の夕立雲がむく／＼と湧き上がり、長い灰色の雲が流れて來ては頭上を掠める。楊の木が不安げに動いて、ざわめきの音を立てる。息苦しい暑さは急に濕り氣を帯びた冷氣に變はり、物の蔭が見る見ぬ中に濃くなつて行く。私は手綱で馬をびしりと叩いて、谷へ下り、楊の一面に生ひ茂つた水のない谿川を渡つて、坂を登り森の中へ入つた。行く手の道は、いつしか闇に包まれた胡桃の叢林の間を蜿つてゐる。私はやつとのことで馬を進めた。馬車は百年の星霜を経た櫛や菩提樹の固い根にぶつかつて、がたん／＼と跳ね上がる。——百姓馬車の轍の跡がつけた深い縦溝を、かういふ根が一步ごとに横切つてゐるのである。さすがの馬も躓きがちになつて來た。強い風がとつぜん梢にうなり聲を立てたかと思ふと、樹々がどつと荒れ立ち、大粒の雨がはげしく落ちて來て、木の葉をばら／＼鳴らした。稻妻がさつと閃いた。いよ／＼雷雨がやつて來たのである。雨は瀧のやうに降りしきる。私は竝み足で進んでみたが、間もなく立ち止まらなければならなくなつた。馬はぬかるみに足を取られるし、私は一寸先も見えないのであつた。やつとの思ひで、私は大きな叢林に身を寄せた。背中を丸くして、顔を蔽つたまゝ、ちつと辛抱よくこの災難が

終るのを待つてゐた。と、不意に一閃の稲妻の中に、高い人影が道の上へ現はれた。私は眼を凝らしてその方を見透かした。——人影はまるで土の中からも湧いたやうに、私の馬車のそばに立つた。

「誰だね？」と底力のある聲で問ひかけた。

「お前こそ誰だ？」

「おらこの森の番人だ。」

私は自分の名を去つた。

「あ、それなら知つてる！ お宅へお歸りのとこですかね？」

「さうだ。ところが、何しろこの夕立ちで……」

「さやう、えらい夕立ちで。」と答へる聲。

白い稻妻が森番の姿を頭から足の爪先きまで照らし出した。すると、忽ち耳をつんざくばかりの短い雷鳴が、それに續いて響き渡つた。雨は前にもまさる勢ひで、どつとばかり降りそゞく。

「なか／＼急にや止みさうもねえですな。」と番人は言葉を續けた。

「どうしたものだらう？」

「なんなら、わしの小舎へ御案内ませう。」と彼はぶつ切ら棒に云つた。

「厄介になりたいな。」

「どうぞ、お乗んなすつて。」

彼は馬の頭の方へ歩み寄り、轡を取つて引き立てた。馬車は動き出した。私は「海に漂ふ獨木舟のやうに」揺れる馬車のクッションに掴まつて犬を呼んでゐた。可哀さうな牝馬は難儀さうに



泥濘ぬかるみに足をぐちゃぐちゃ／＼云はせながら、這つたり躓つまずいたりした。森番はまるで幻のやうに、轆くわの前を右左によろ／＼してゐた。私はかなり長いあひだ道中をつづけた。つひに案内の森番が足を止めて、「さあこれがわつしの家で、旦那。」と落ちついた聲で云つた。——木戸がぎいと軋こんで幾匹かの仔犬が一齊に吠え出した。私は頭を上げて、稻妻の光りに透かして見ると、編み垣をめぐらした廣い背戸のまん中に小さな小舎があつた。一つの小窓から仄かな火影が洩れてゐる。森番は馬を上がり段のところまで曳ひいて行つて、戸を叩いた。「たゞ今、たゞ今！」といふか細い聲が聞こえ、跣はだしの足音がぱた／＼して、門が軋こんだと思ふと、粗末な襦じゆん衣いを着て、布の織端を帯にした十二ばかりの女の子が、手に提灯をさげて、闕あなぎはに現はれた。

「旦那にあかりをお見せしな。」と彼は娘に云つた。「旦那、お馬車を庇かばの下に入れて置きますで。」

娘は私の顔をちらと見て、小舎の中へ引つ込んだ。私はその後からつゞいた。

森番の小舎は、煤すすけて低くがらんとした一間つきりで、天井床てんじやうどもなければ仕切りもなかつた。ぼろ／＼の毛皮外套けがしが壁に懸かつてゐる。床凡とこの上には單發銃たんぱつじゆがおいてあつて、片隅には襪くつ履ひきの上うへに燃えて、もの悲しげにぱつと燃え立つたり、消えさうになつたりしてゐる。小舎のまん中には、長い竿の先きに縛りつけた揺り籠ゆりごが下がつてゐた。娘は提灯を消して、小さな床凡とこに腰をかけ、右手で揺り籠を揺り、左手で木つばを直しはじめた。私はあたりを見まはした——私のところは疼いたき出した。夜百姓の家へ入るのは氣持きもちちのよいものではない。揺り籠の中の赤ん坊は、苦しさうに忙いそがしい息づかひをしてゐた。

「お前、こゝに一人きりなの？」と私は娘に訊ねた。

「へえ。」と娘はやつと聞こえるやうな聲で云つた。

「お前は森番の娘かい？」

「へえ。」と娘は囁ささいた。

戸かどがぎいと軋こんで、森番が頭を屈かめながら闕あなを跨またいで入つて來た。床の上から提灯を取り上げて卓こに近ちかより、蠟燭ろうそくに火をつけた。

「大方、木つばのあかりにやお馴なれなさらんでせうな？」と云つて、長い捲まき毛けをさつと振つた。

私は彼の姿を眺めた。こんな立派な男は、さうざらに見られるものでない。彼は背が高く、盛肩幅せきかみが廣く、見事な體格たいかくをしてゐる。濡ぬれた手織りの襦じゆん衣いの下から逞たくまましい筋肉きんじゆがむく／＼と盛り上がり上あがつてゐる。黒い縮ちぢれた鬚ひげが嚴げんめしく男らしい顔を半ば蔽おほひ、兩方りやうほうから生なえ續ついた太い肩の蔭かげからは、餘り大きくない鳶とび色の眼まなこが大膽だいだんに光つてゐる。彼は兩手を軽く腰こしに當あてて、私の前に立ち止とまつた。

私は禮を述べ、名前を訊ねた。

「わしの名はフォマーですが、」と彼は答へた。「綽名ちやくなは狼おおかみと申まします。」オリヨール縣では一人暮らしの氣難きがたかしい人間を狼おおかみといふ

「あ、お前が狼おおかみなのか？」

私は一しほ好奇心きんしんをそゝられながら、彼を眺めた。近在きんざいの百姓ひやくしやう一同いどうから、鬼おにのやうに怖おそがられてゐる森番のビリュークのことを、私はエルモライやその他の人たちから始終しじゆ聞いてゐた。この連中れんちゆうに云はせると、今までこれほど自分の仕事しごとを見事にやつてのける人間にんげんは、又と二人見たこと



がないとのことである。「よしんば、枯枝一束だつて持つて行かせやしねえ。どんな時だつて、たとへよる夜中でも、いきなり何處からともなく飛びかゝつて来るんだ。さうしたらもう手向かふ事なんか夢にも出来やしねえ——まるで悪魔みてえに力があつて、はしつこいんだから……然もどんなにしたつて抱き込むわけに行かねえ。酒だらうが金だらうが、どんな餌にも喰ひつくこつちやねえ。今までも、村の連中があいつをあの世へ追つ拂はうとした事も、一度や二度ぢやなかつたけれど、駄目だ——その手にのりやがらねえ。」

こんな風に近在の百姓たちは、ビリュークのことを噂してゐた。

「ぢや、お前がビリュークなんだね。」と私は繰り返した。「實は、私もお前の話を聞いた事があるよ。お前は誰にも容赦しないさうだね。」

「自分の役目をちゃんとしてゐるだけでさ。」と彼は氣難かしさうに答へた。「たゞで御主人様に食べさせて貰ふわけにや行かねえからね。」

彼は腰にさした斧をとつて、床の上に坐り、木つばを割りにかゝつた。

「ときに、お前、かみさんはないのかね？」と私は訊ねて見た。

「死んだんだね、してみると？」

「いんえ……へえ、死んだんで。」と彼は云ひ添へて顔を反けた。

私は暫らく黙つてゐた。彼は眼を上げて私の顔を見た。

「旅あきんどと駈け落ちしたんでがす。」と彼はこぼつたやうな微笑を浮かべながら云つた。女の子は顔を伏せた。赤ん坊が眼をさまして泣き出した。娘は揺籠の傍へ行つた。「そら、これ

をやれ。」とビリュークは、汚いおしやぶりを娘の手に渡しながら、かう云つた。「ほれ、彼奴まで棄てて行きやがつたんで。」赤ん坊をさしながら、低聲に云ひ續けた。彼は戸口へ近づいて、立ち止まり、こちらを振り向いた。

「なんでせうな、旦那なんかは、きつと、」と彼は云ひ出した。「わつし共の麵麩なぞお上がりになりやしねえでせうな、うちにや麵麩よりほか……」

「私は別に腹なんかへつてゐないよ。」

「それぢや、およろしいやうに。サモワールくらゐ支度して差し上げたけれど、生憎お茶がねえので……ひとつ行つて、旦那の馬がどうしてゐるか見てまゐりませう。」

彼は外へ出ると、戸をぱたんとならした。私はもう一度邊りを見廻した。小舎は前よりも少しほ哀れに感じられた。冷たく澱んだ煙の刺すやうな匂ひが不快に息をつまらせる。娘はその場を動かうともせず、眼さへ上げなかつた。とき／＼揺籃を押ししたり、ずり下がる襦袢をおづ／＼と肩へ引き上げたりしてゐた。露はな足は少しも動かないで、だらりと垂れてゐた。

「お前の名はなんて云ふの？」と私は訊ねた。

「ウリータ。」物悲しげな顔を尙も低く垂れながら、娘はかう云つた。

森番が入つて来て、床几に腰を下ろした。「夕立ちはやみかけましたよ。」暫らく黙つてゐた後で、彼は口を開いた。「もしなんなら、森の出口までお送りしますが。」

私は腰を持ち上げた。ビリュークは鐵砲を下ろして藥池をあらためた。

「それはなんのためかね？」と私は訊ねた。



「森中でわるきをする奴が居りますんで……牝馬ヶ谷で樹を盗んでるやがるので。」私の不審さうな眼付きに答へて、彼はかう云ひ足した。

「へえ、それがこゝから聞こえるのかね？」

「戸外なら聞こえますよ。」

私たちは一緒に外へ出た。雨はやんでゐた。遠くの方には雨雲の層が幾つも重苦しく群らがつてゐて、とき／＼尾の長い稲妻が閃いた。けれど、頭の眞上にはもうとところ／＼紺青色の空が見え、箭のやうに飛ぶ薄雲の間から星がちら／＼輝いてゐる。雨に濡れ、風に揺り立てられてゐる木立の輪郭は、次第に闇の中から浮き出して來た。私たちは耳を澄まし始めた。森番は帽子を脱いで、目を伏せた。「あ……あれだ。」と不意に云つて、手をさしのべた。「どうもはや、選りに選つてこんな晩に。」私は木の葉のざわめきの外には、なんの物音も聞こえなかつた。ビリュークは庇の下から馬を引き出した。「本當にこんなふうだと、ひよつとしたら、」と彼は大きな聲で云ひ足した。「うっかり見遁がしたかも知れねえ。」「私も一緒に見よう……構はないかね?」「よろしうがす、」と彼は答へて、馬を押し戻した。「すぐに彼奴を引つ掴まへて、それからお送りしますよ。さあ参りませう。」

私たちは出かけた。ビリュークが先きに立つて、私がそれに續く。どうして彼が道を見分けるのか、それはまるで分からなかつた。彼はほんのとき／＼足を止めたけれど、それも斧の響きに耳を澄ますためであつた。「ほら、」と彼は齒を喰ひしばつたまゝ、呟いた。「聞こえるでせう? 聞こえるでせう?」「一體どこに?」ビリュークは愛想をつかしたやうに肩を竦めた。私たちは谿へ下りて行つた。風がほんのちよつとの間静まつたので、規則正しい斧の音が私の耳にもはつ

きり聞こえて來た。ビリュークは私をちらと見て、頭を一つ振つた。私たちは濡れた羊齒やいらくさを分けて進んだ。低い籠もつたやうなどよみが長々と響いた。

「倒しやがつたな……」とビリュークは呟いた。

その間に、空はずん／＼晴れて行つた。森の中はほの明るくなつて來た。たうとう私たちは谿から出た。「こゝで少し待つてゐて下せえ。」と森番は囁いて、身を屈め、鐵砲を持ち上げると、茂みの中に姿をかくした。私は固くなつて、耳を澄まし始めた。絶え間ない風のざわめきの間から、程遠からぬところに微かな物音が聞こえるやうに思はれた。用心ぶかく斧で枝を拂ふ音がして、車の轍がきしみ、馬が鼻を鳴らす……「どこへ行くんだ? 待て!」とだしぬけにビリュークの銅鑼のやうな聲が響き渡つた。すると、もう一人の聲が、兎のやうにおど／＼した慘めな叫びを立てる……掴み合ひが始まつた。「ふーざけやがるな、ふーざけやがるな!」とビリュークは息をはずませながら繰り返した。「逃がすもんか……」私は聲のする方へ飛んで行き、一足毎に躓きながら、掴み合ひの現場へ駆けつけた。伐り倒された樹の傍には、森番が地べたでござごそしてゐる。彼は泥棒を組み敷きながら、帯で後ろ手に縛り上げてゐるのであつた。私はそばへ近づいた。ビリュークは起き上がつて、泥棒を引き立てた。見ると、襦袢を身に纏つて、長い髯をおどろに亂した、濡れ鼠の百姓である。すぐ傍には、ごつ／＼した蓆を半分背に被つたやぐざ馬が、車臺だけの荷馬車をつけられて立つてゐる。森番は一言も物を云はなかつた。百姓もやはり黙り込んで、たゞ頭を振つてゐるばかりであつた。「放してやれよ。」と、私はビリュークの耳に囁いた。

ビリュークは黙つて馬の額毛を左手に掴んで、右手で泥棒の帯を掴まへた。「さあ、きり／＼



立て、この間抜け野郎！」と彼はきびしく云つた。「そら、あの斧を取つて下さえ。」と百姓はおどどと云つた。「これを失くしちや勿體ねえや！」と森番は云つて斧を拾ひ上げた。かうして歩き出した。私はその後から躓いて行つた……雨がまたばら／＼し始めたと思ふと、忽ち車軸を流すやうに降り出した。やつとの思ひで小舎まで辿り着くと、ビリュークは抑へた馬を背戸の眞ん中へうつちやらかして、百姓を家の中へ引つ張り込み、帯の結び目をゆるめて、隅っこに引き据ゑた。ペーチカの傍でうと／＼しかけてゐた娘は、むつくりと跳ね起きて、恐ろしさに口もきかず、私たちをみつめるのであつた。私は床几に腰を下ろした。

「ちよつ、なんといふ降りだ。」と森番が云つた。「こりや、暫らくお待ちにならなけりや。少し横におんななさいませんか？」

「有難う。」

「旦那様のお目障りだから、こいつを物置きにでも閉め込んでやりたいんだけど、」と百姓をさしながら、言葉をついだ。「何分、その、門が……」

「其處へ置いてやるがいゝ。觸らないで置きなさい。」と私はビリュークを遮つた。

百姓は上眼づかひに私を盗み見した。私は腹の中で、どうしてもこの可哀さうな男を助けてやらうと誓つた。百姓は身動きもせず、床几に腰かけてゐた。提灯のあかりに透かして、瘦せた皺だらけの顔と、垂れ下がつた黄色い眉と、落ちつかぬ眼つきと、萎びた手足が見分けられた……娘はそのすぐ足もとで床の上に横になると、早速また寝入つてしまつた。ビリュークは卓の脇に坐つて、両手で頭を抱へてゐる。蟋蟀が隅の方で鳴いて……雨が屋根を打つては、窓を傳はつて流れる。私たちはみんな押し黙つてゐた。

「フォマー・クジミッチ、」だしぬけに、百姓がいぢけ切つた響きのない聲で云ひ出した。「なあ、フォマー・クジミッチ！」

「なんだい？」

「かんべんしてくんろ。」

ビリュークは返事もしなかつた。

「かんべんしてくんろ……貧ゆゑの盗みだ……かんべんして。」

「てめえたちのことはみんな知り抜いてるよ。」と森番は不愛想に答へた。「手前の村はみんなさうなんだ——一人残らず泥棒ばかりだ。」

「かんべんしてくんろ。」と百姓は一つことばかり繰り返してゐる。「お邸の番頭が苛めるもんだから……丸裸かにされちまつたんだ、ほんとによ……かんべんしてくんろ！」

「丸裸かにされた……それだつて、盗みをするちふ法があるかい。」

「かんべんしてくんろ、フォマー・クジミッチ……一生を臺なしにさせねえでくんろ、おめえも知つての通り、あの番頭は人を餌食にしやがるんだ、ほんとによ。」

ビリュークはそつぽを向いた。百姓は熱病にでも取りつかれたやうに、がた／＼慄へてゐた。頭を小刻みに慄はせて、息づかひも不揃ひであつた。

「かんべんしてくんろ、」と彼は悄氣きつた絶望の聲で繰り返した。「かんべんしてくんろ、拜むからかんべんして！ おら辨償するよ。ほんとに嘘はつかねえ、全く食ふに困つたからなんだ……餓鬼どもがあんまり喚き立てるのでな、察してくんろ。どうにもはや苦しうなやつだ。」

「それだつて、とにかく、盗みなんかする奴があるかい。」



「でも馬だけは。」と百姓は云ひつづけた。「あの馬は、せめてあれだけでも……かけ替へのねえ飼ひもんだから……放してやつてくんろ！」

「いけねえと云つてるぢやねえか。この俺だつて人に使はれてる身體だから、そんな事したら、こつちが叱られらあ。それに手前たちを増長させるわけもねえからな。」

「かんべんしてくんろ！ 困ればこそだよ、フォマー・クジミッチ、嘘もかくしもねえ、困ればこそしたこつた……かんべんして！」

「わかつてるよ！」

「なあ、かんべんしてくんろ！」

「え、てめえなんかとぐづく云ひ合つたつて仕様がねえ、大人しく坐つてろ、さもなけりや、いゝか？ こゝに旦那のいらつしやるのが見えねえのか？」

可哀さうな男は目を伏せた……ビリユークは一つ欠伸をして、卓の上へ頭を落とした。雨は何時までも降り止まない。私はどうなる事かと待ち受けてゐた。

百姓はいきなり反り身になつた。眼はぎら／＼と輝き、顔にはさつと血の色が漲つた。

「やい、さあ、勝手しやがれ、さあ、この俺を思ふ存分にするがいゝ、さあ、」と目を半眼にして、口もとを引き吊らせながら、かう云ひ出した。「さあ、血も涙もねえ鬼畜生、基督信者の血が飲めると思ふか、さあ、飲めるなら飲みやがれ……」

森番はくるりと向き直つた。

「貴様に云つてるんだ、貴様に。この外道め、ひとでなし、貴様に云つてるんだぞ！」

「手前は酔つぱらつてでもゐるのか、悪態なんか吐きやがつて！」と森番は呆れて云つた。「氣

でも違つたのか、おい！」

「酔つぱらつてゐるか……手前の金で買った酒ぢやあるめえし、血も涙もねえ鬼め、畜生、畜生、畜生！」

「え、この野郎……一つ貴様を……」

「そんな事で吃驚するものか？ どうせ、俺は駄目になるんだ。馬を取られたら、二進も三進も行きやしねえ！ 叩き殺せ、どつちみち同じこつた。餓死しようとして、こゝで撲り殺されよう、結局變はりはありやしねえ。みんな死んぢまへ、女房も餓鬼も——みんなくたばつちまへ……」

だが、貴様は、待つてろ、そのまゝにや置かねえから！」

ビリユークは立ち上がった。

「撲れ、撲れ、」と百姓は殺氣だつた聲で應じた。「撲れ、さあ、さあ、撲りやがれ……」(娘はあたふたと床から跳ね起きて、ぢつと百姓に眼を据ゑた。)

「撲れ、撲れ！」

「黙れ！」と森番は呶鳴つて、二あし踏み出した。

「澤山だよ、もう澤山だよ、フォマー」と私は叫んだ。「うつちやつておけ……構はないがいゝよ。」

「俺、黙らねえぞ。」と、不仕合はせな百姓は言葉を續けた。「人間、どうせ一遍は死ぬんだ。この人殺し、畜生、七生までも呪はれてゐやがれ……だが、待つてろ、威張り腐つてるのも長いことぢやねえ！ 今に貴様も伸びちまふだぞ、待つてゐやがれ！」

ビリユークはその肩をむすつと擱んだ……私は百姓を助けてやらうと飛んで行つた……

「構はねえで下せえ、旦那。」と森番は私に一喝した。



私はそんな脅かしなど恐れなくて、もう手をさし伸べたが、驚き入ったことには、彼はぐいとかぶせ、戸をさつと開けて外へ突き出した。

「さあ、その馬を連れてとつと失せやがれ！」と、彼は百姓の後ろから呶鳴つた。「だが、氣をつけろ、今度おれの手にかゝつたら最後……」

彼は小舎へ引返して、隅の方でこそくしはじめた。

「どうも、ビリューク、」と私は漸く口を切つた。「お前にはびつくりさせられたよ。今の様子を見ると、お前はなか／＼素晴らしい奴だなあ。」

「え、よして下せえ、旦那。」と彼は忌々しさうに遮つた。「だが、人にだけは仰つしやらねえで。まあ、それより旦那をお送りしませう。」と彼は云ひ足した。「どうやら、この雨はなか／＼止みさうもねえですから……」

外では百姓の荷車の轍の音がし出した。

「ふむ、出かけやがつた！」と彼は呟くやうに云つた。「だが、俺あ彼奴を！……」  
三十分ばかり経つて、彼は森の出口で私に別れを告げた。

## 二人の地主

私に對して好意を寄せて下さる讀者諸君、私はもう幾たりかの隣人を諸君に御紹介する光榮を有したが、こゝでもまた序に（われ／＼作家仲間にとつては、なんでもよい序なので）なほ二人の地主を紹介さして頂きたい。私はこの人たちの所へ獵に行つたものであるが、二人とも極く立派な温厚篤實の士で、各郡部の人たちから一様に尊敬されてゐるのである。

先づ手始めとして、豫備陸軍少將ギヤチェスラフ・イラリオノギッチ・フアルインスキーのことを述べようと思ふ。一つかういふ人物を想像して頂きたい。背の高い、曾ては整つた恰好であつたのが、今ではいくらか肉がだぶついてゐるけれど、しかし決して老いぼれてはゐないばかりか、年寄り臭いところさへない男盛りの、云はゞ脂ののり切つた人物である。尤も、昔からきちんとしてゐて、今でも感じのいい顔だちは多少變はつて來た。頬がたるんで、眼の周りには後光（おち）のやうな小皺が出來、齒は、かのプーシキンのサヂイ（オネーギンの一節を引用し）が云つてゐるやうに、或るものは既になくなつてゐる。亞麻色の髪の毛も、少くとも無事に残つてゐるものは、すつかり薄紫色に變はつてしまつた。それはロームヌイの馬市場でアルメニア人と自稱する猶太人から買つた薬のお蔭なのである。しかし、ギヤチェスラフ・イラリオノギッチは歩きぶりなども元氣がよく、朗かな笑ひ聲を立て、拍車を鳴らし、口髭を捻り、自ら老騎兵と名乗つてゐる。けれども御承知の通り、本當に年を取つた人は、決して自分から老などと名乗らないものである。彼はいつもフロックコートを着て、一番上まできちんと釦をかけ、糊の利いたカラーにネ



クタイを大きく盛り上がらせ、霜降り鼠の軍隊式ズボンを穿いてゐる。帽子は前のめりに被つて、後頭部をまる出しにしてゐる。極めて好人物ながら、かなり變はつた考へ方や癖を持つてゐる。例へば、餘り金持ちでもなければ、官等も高くないやうな貴族などを相手にする時は、決して自分と同等の人間並みに扱はない。かういふ連中と話をする時には、大抵いつもこつ／＼の白いカラーにぐつと頬を押し當てながら、じろ／＼横目に眺めてゐるが、どうかすると、不意に向き直つて、鋭い眼眸をぢつと浴びせかけ、むつ／＼と黙り込んだまゝ、毛の下に透いて見える頭の地肌をそこらぢゆう動かすのである。おまけに言葉も一種特別な發音で、例へば「有難う、バーゼル・ワシーリエキツチ」とか、「どうぞこちらへ、ミハイル・イワーヌイチ」といふやうな事を云はないで、「あがとう、パール・アシーリチ」とか、「どー、こちい、ミハール・ワイヌイチ」と云ふのである。社會上の地位の低い人間に向かふと、その態度は一そう奇妙になつて來る。彼は、てんで相手を見向きもしないで、自分の希望を述べたり、命令を授けたりする前に、心配さうな考へ事でもするやうな顔付きをして、幾度も續けざまに「お前の名前はなんて云ふのだ？：お前の名はなんて云ふんだ？」と繰り返すのだが、その「なんて」といふ言葉に恐ろしく力を入れて、その後はひどく早口に云つてしまふので、全體が牡鷄の鳴き聲に甚だよく似通ふのであつた。世話やきで恐ろしい吝嗇漢であつたが、領地の經營は拙かつた。彼は、退役の曹長で世にも珍らしい馬鹿者を支配人に雇つてゐた。尤も、領地經營の間抜けさ加減にかけては、ペテルブルグのある顯官にかなふ者はこの近在に誰もなかつた。この顯官は番頭の報告で、領地の乾燥小屋が度々火災にかゝり、そのために穀物が夥しく烏有に歸するのを見て、今後は火の氣がすつかり無くなるまで、穀束を乾燥場に入れてはならぬと、いとも嚴重な命令を發したものである。や

はり同じ大官が、自分の畑にすつかり罌粟を蒔かせようと思ひつゝいた。それは罌粟の方が稈麥より値がよいから、従つて罌粟を蒔く方が有利だといふ、至極單純な算盤勘定から出た事なのである。同じくこの人が領地内の農婦たちにペテルブルグから送つた雛型通りの頭飾コシエを被るやうに云ひつけた。で實際今でも彼の領地内では百姓の女どもが頭飾を被つてゐる。但し、當り前の頭巾の上に載つけてゐるのである。……さて、ギヤチェスラフ・イラリオノギツチの上に話を戻さう。ギヤチェスラフ・イラリオノギツチはまた大變な漁色家で、郡町の竝木街などで濫皮の剥けた女でも見つけようものなら、早速あとを追つかけて行くが、そのあとで忽ち跛を引き始める。……こゝが注意すべきところなので、骨牌を闘はすのが好きだけれど、相手は身分の低い人間に限る。かういふ連中は「閣下」と崇めてくれるし、こちらは思ふ存分相手を苛めたり、やつ／＼けたり出来るからである。ところがたま／＼知事だとか、位の高い人とかの相手をやるやうなことがあると、忽ち驚くばかりの變化が生じる。こゝ／＼笑つたり、領いたり、相手の眼色を窺つたりして、——體ぢゆうから、蜜でも流れないばかりの有様である。……勝負にまけても泣き言一つ滾さない。ギヤチェスラフ・イラリオノギツチは餘り讀書しない。たまに讀む時には、ひつきりなしに口髭や眉を動かして、まるで顔の下から上へかけて、波でも走つてゐるやうである。ギヤチェスラフ・イラリオノギツチの顔に現はれるこの波狀運動は、時たま（無論客のゐる前で）『Journal des Debats』の誌面に眼を走らすやうな時など、殊に甚だしいのである。選挙の時などは、かなり重要な役割を勤めるのであるが、貴族團長といふやうな名譽職は、けちだものだから、御辭退申し上げて了ふのである。『諸君』と彼は自分につき纏ふ貴族達に向かつて、いつもお決りにこんな事を云ふ。然もその聲には、如何にも長者らしい氣持ちと自尊心が充ち満ちてゐる。



るのであつた。『私はこの光榮を深く感謝するものではありませんが、なにぶん餘暇を隠棲に捧げようと決心いたしましたので。』こんな風に云ひながら幾たびか頭を左右に振つて、さて、それから勿體らしく、頸と頬をネクタイの上にのせる。彼は若い時分にさる大官の副官を勤めてゐたとかで、その人の話をする時には必ず親しげに名前と父稱で呼んだ。人の噂では、彼はたゞの副官の勤めばかりでなく、例へば大禮服を着てホックまでかけた上、長官を風呂で蒸してやつたとかいふ事であるが——しかし世間の噂を一々眞に受けるわけにはゆかない。尤も、フアルインスキイ將軍自身は自分の勤務生活を語るのを好まないが、これも凡そ奇妙な話である。また實戰に參加した事もないらしい。フアルインスキイ將軍は餘り大きからぬ家に一人で暮らしてゐる。結婚生活の幸福は一度も味はつた事がないので、いまだに花婿の候補者とされてゐる。しかも條件のいゝ候補者とされてゐるほどである。その代はり、家には三十四五の女中頭がある。しかも條件黒く、肥り肉で、みづ／＼してゐて、鼻の下に薄い髭を見せ、普段の日は糊のごは／＼について着物をきて歩き、日曜にはモスリンの袖のついたものまで着込むのである。ギャチエスラフ・イラリオーノギッチは、地主連が知事その他のお歴々のために盛んな宴會を開いた時などは、なかなか堂々たるもので、かうなると所謂適材適所なのである。こんな場合、大抵知事の右手に陣取るか、それとも餘り遠くないところに坐つて、宴會の初めには、自己の威嚴を保つといふ態度で、うしろへ反り返つたまゝ首を曲げないで、一座の客の丸い後ろ頭や、立襟などを尻眼にかける。その代はり食事の終る頃には陽氣になつて、四方八方へ微笑を浴びせ出す。(尤も知事の方へは宴會の初めからこ／＼し續けてゐるのである。)どうかすると、女性の健康を祝して乾盃を提議する事さへある。女は、彼の言葉を藉りと、我が地球の花なのである。フアルインスキイ將

軍は、凡て莊重な公けの儀式だとか、試験だとか集會だとか、展覽會だとかに出席しても、なかなか立派なものであつた。祝福を受けに行く態度なども堂に入つてゐた。ギャチエスラフ・イラリオーノギッチの下僕たちは、芝居のはねる時とか、渡し場とか、その他混雜する場所騒いだり、喚いたりなどしない。それどころか、群集を押し分けたり、馬車と呼んだりする時、咽喉の奥から出る氣持のいゝ上低音で、『ごめん、ごめん、フアルインスキイ將軍をお通し下さい。』とか、『フアルインスキイ將軍の馬車を……』とか云ふ。尤も、フアルインスキイ將軍の馬車は可成り古風な恰好をしてゐて、馭者や別當の仕着せはいゝ加減すり切れてゐるし(この仕着せが赤い縁飾りのついた鼠色だといふやうな事は、殆ど述べる必要もなからうと思ふ)、馬もかなり年をとつて、今までにずぶん御奉公して來たものである。けれど、ギャチエスラフ・イラリオーノギッチは、凡そ伊達などといふ考へがまるでなかつたばかりか、派手な眞似をして人目を驚かすのは身分にふさはしからぬことだとまで考へてゐる。フアルインスキイは辯舌の才を持つてゐない、と云ふより、さういつたものを示す機會がないのかも知れぬ。とにかく議論が好きでないばかりか、人から言葉を返されるのが大嫌ひで、すべて人と、特に若い人と長話をするのを精避けるやうにしてゐる。それは全く安全な方法である。さもなければ、今時の連中を相手にすると、それこそいゝ災難で、服従といふ事を忘れ、尊敬の念を失ふのが落ちだからである。目上の人に向かつたときは、フアルインスキイは概ね無言の行をやつてゐるが、明かに輕蔑してゐながら、とにかく交際だけは續けてゐる目下の者に向かふと、ぶつきら棒なとげ／＼しい話しぶりをして『だが、あんたも下らない事を云ふね。』とか、『かうなると、あんた、私も餘儀なく御注意せんけりやならんが』とか、『君もいゝ加減、相手が誰かといふ事を考へんけりやならん筈



だ。』などと云つた様な文句をのべつ遣ふのである。郵便局長や、郡役所あたりの小役人や、驛長などは特に彼を恐れてゐる。彼は自宅では一切人に會はないで、噂によれば、爪で火をともしやうな暮らしをしてゐるとか。さういふ事はいろ／＼あるけれど、とにかく彼は立派な地主に相違ない。『老軍人で、金銭に恬淡な人で、行爲の正しい老兵だ』と、近在の人たちは彼のことをさう云つてゐる。たゞ縣の檢事だけは、人がフワルインスキイ將軍の優れたしつかりした性質を褒めそやすと、僭越にも冷笑を洩らしてゐるが——しかし嫉妬といふものは、どうにも致し方のないものである！……

が、まあこれ位にして、今度はもう一人の地主の方へ移らう。

マルダリイ・アポロヌイチ・ステュグノフは、何一つフワルインスキイとは似たところがな。殆どどこにも勤めた事はなきさうだし、かつて美男子などと云はれた事もない。マルダリイ・アポロヌイチは、背の低い、ぼつちやりした、禿頭の小柄な老人で、頸は二重頸、柔かな手をして、かなり大きな腹を突き出してゐる。大の客好きで、軽口やで、所謂面白三昧の暮らしをしてゐる。夏も冬も、綿の入つた縞の部屋着をきて歩く。たゞ一つだけフワルインスキイ將軍と似てゐるといふのは、やはり同様に獨身者だといふ事である。彼は五百人の農奴を抱へてゐる。マルダリイ・アポロヌイチの領地經營といふのは可成り上つ調子なもので、十年許り前にも時勢に遅れない様にと云つて、モスクワのブテノフから脱穀機械を買つたのはいゝが、それつきり納屋に藏ひ込んで、それで事はもう濟んだやうに澄ましてゐる。時たま夏の晴れた日など、競走馬車の支度を命じて、畠へ出かけるが、たゞ作物の具合を見たり、矢車草を摘んだりする位のものである。マルダリイ・アポロヌイチは萬事、昔風に暮らしてゐる。家も昔の建て方で、

先づ支關へ入ると、型の如くクワスや、蠟燭や、草の匂ひがする。すぐその右手には、パイプや布巾をのせた脇棚がある。食堂には祖先代々の肖像、蠅、セラニウムの大きな鉢、調子の狂つたピアノ——客間には長椅子が三つ、テーブルが三つ、姿見が二つ、それに彫刻した青銅の針をもつた黒ずんだ瑛瑯塗りのじい／＼云ふ時計——書齋には書類を載せたテーブル、前世紀のいろんな著書から切り抜いた繪を貼つた青つぽい衝立、微くさい本が詰まつて黒い埃のたまつた蜘蛛の巣だらけの書棚、ふわ／＼した安樂椅子、伊太利風の窓、それからびつたり釘づけにされた、庭へ出る扉口……一口に云へば、何も彼も紋切り型なのである。マルダリイ・アポロヌイチの所には召使ひがうよ／＼ゐて、それがみんな古風な服装をしてゐる。高い襟のついた、長い紺の長上衣を着て、どんよりした色のズボンを着き、短い黄がかつたチョッキを着けてゐる。彼等はお客に向かつて『お前さま』と云ふ。經濟一式の締括りをしてゐるのは、毛皮外套の裾まで届きさうな鬚を生やした百姓上がりの支配人で、家の中の切り盛りをしてゐるのは、肉桂色の布で頭を縛つてゐる皺だらけのけちな婆さんである。マルダリイ・アポロヌイチの既には、大小さまざまな馬が三十頭もゐて、主人が外出する時には、百五十ブードも目方のありさうな自家製の幌馬車に乗つて行く。客が来るのを非常に喜んで、素晴らしい御馳走をする。つまり、頭がぼつとなるやうな露西亞料理の特色を發揮して、日の暮れるまで骨牌でもする外どうにもならないやうに仕向けるのである。當人は決して何一つするでもなく、夢判斷の本さへ讀まなくなつてしまつた。しかし、我が露西亞にはまだ／＼からいふ地主が可成り澤山ある。一體なんのために、どういふつもりで、こんな男の話を持ち出したのか？ といふ御不審があるかも知れないが……それに答へる代はりに、或る時マルダリイ・アポロヌイチを訪問した話をさせて頂きたい。



私が訪ねて行つたのは夏の夕方七時頃であつた。たつた今、晩の祈りが済んだばかりで、近ごろ神學校を出たらしい、年の若い、如何にも内氣らしい僧が客間の戸口に近く、椅子の端つこに腰をかけてゐた。マルダライ・アポローヌイチはいつものやうに、極めて懇ろに私を迎へた。彼は心底から客といふ客を喜んだ。それに根がこの上なく人の好い性質だつたのである。若僧は立ち上がつて帽子を取つた。

「待ちなされ、待ちなされ、あんた。」とマルダライ・アポローヌイチは私の手を離さうとしないでかう云つた。「歸つちやいけません……今あんたにヲートカを持つて来るやうにいひつたから。」

「私は飲めない口ですから。」と若僧はもちく／＼口の中で云つて、耳のつけ根まで赤くした。

「なんの、つまらん事を！」とマルダライ・アポローヌイチは答へた。「ユーシカ！ ユーシカ！ お坊さまにヲートカを持つて来て差し上げろ！」

年の頃八十ばかりとも思しき、背の高い瘦せた老人のユーシカは、一面に人肌の汚黴しみのついた黒つばい盆に、ヲートカのコップをのせて入つて來た。

若僧は辭退を始めた。

「飲みなされ、あんた、氣取らんでもええ、それぢやいかん。」と地主はたしなめるやうに云つた。

可哀さうな若僧は、仕方なさうにその言葉に従つた。

「さあ、あんた、これでもう歸んなさつてもよろしい。」  
若僧は會釋をしはじめた。

「いや、よろしい、よろしい、行きなさい……」

「中々いゝ男ですよ。」と、マルダライ・アポローヌイチはそれを見送りながら、言葉を續けた。

「私はすっかり氣に入りましたよ。たゞ一つ疵と云ふのは——何分まだ年が若い。したが、あんたは如何ですか、え……いけません、何を仰つしやる？ ぢやバルコンへ出てみませう——まことにどうも素晴らしい晩ですからな。」

私たちは露臺へ出て腰を下ろし、四方山の話の始めた。マルダライ・アポローヌイチは下を覗いて見たと思ふと、だしぬけにひどくわく／＼し出した。

「あれは何處の雞だ？ 何處の雞だ？」と彼は騒ぎ出した。「一體どこの雞が庭中を歩き廻つてゐるのだ？……ユーシカ！ ユーシカ！ うちの庭を歩き廻つてゐるのはどこの雞か、行つて訊ねて來い。あれは全體どこの雞だ？ 今まで何度いけないと云つたか知れないのに、ほんたうに何度いつた事やら！」

ユーシカが駈け出して行つた。

「なんといふだらしない事だ！」とマルダライ・アポローヌイチは繰り返し繰り返し云つた。「實にたまらん！」

いまだに覺えてゐるが、この不運な雞といふのは、二羽は斑紋入りで、一羽は獅子頭を被つた白いのであつたが、悠々と林檎の樹の下を歩き續けながら、時折なが／＼と鬨をつくつて、自分の感懐を吐露してゐた。と、突然ユーシカが帽子も被らずに、手に棒を持つて、三人の血氣盛んな下男を引きつれながら、一齊に雞どもに飛びかゝつて行つた。それはなか／＼觀物であつた。雞どもはけた／＼ましく叫びをあげ、羽をばた／＼させ、跳び上がったたり、耳を聳するばかりに啼



き立てたりした。下男たちは駈け廻る拍子に、躓いたり倒れたりした。主人はバルコニーの上から逆上せ切つた聲で、「掴まへろ、掴まへろ！ 掴まへろ、掴まへろ！ 掴まへろ、掴まへろ、掴まへろ、掴まへろ！」と喚き続ける。漸く下男の一人が獅子頭の雞を掴まへて、胸を地べたへ押しつけた。すると丁度その時、往來から庭の編み垣を越えて、枝切れを手に持つた十、一ばかりの女の子が、髪を振り亂して飛び込んで來た。

「あゝ、誰の雞かこれで分かつた！」と地主は勝ち誇つたやうに叫んだ。「馭者のエルミールの雞だ！ さては、彼奴がナタールカに雞を追ひ込ませやがつたのだな……まさかパラシヤを寄越すことはようしなかつたと見える。」と地主は小さな聲で云ひ添へると、意味あり氣ににやりと笑つた、「おい、ユーシカ！ 雞はうつちやらかして、ナタールカを掴まへて來い。」

けれどもユーシカが、吃驚りしてゐる小娘のところへ呼吸を切らしながら駈けつづける間もなく、どこから現はれたのか、女中頭がいきなり小娘の手を掴んで、續けさまにその背中を平手でどやしつけた

「その調子、さうだ、その調子。」と、地主が傍から口を入れる。「テ、テ、テ！ テ、テ、テ……そして雞も取り上げてしまへ、アウドーチャ。」と大きな聲で云ひ足して、晴々しい顔を私の方へふり向けた。「どうでした、あなた、今の捕り物は、え？——見てて汗までかきましたよ。御覽なさい。」

かう云つて、マルダライ・アポローヌイチはから／＼と笑つた。

私たちはバルコニーに腰を据ゑてゐた。全くそれは珍らしく氣持ちのいゝ晩だつたのである。茶が運ばれた。

「お訊ねしますが、」と私は口を切つた。「マルダライ・アポローヌイチ、あの谿の向かうの街道際に引つ越しさせられたのは、ありやあなたの百姓なんですか？」

「私ので……それがどうしました？」

「どうしてあんな事をなさるんです、マルダライ・アポローヌイチ？ だつて、罪な話ぢやありませんか。百姓たちに建ててやつた小舎は、狭苦しいひどいもので、周りには立木一本見當たらなないし、生簀さへない。井戸といつたら一つきりで、それさへなんの役にも立たないといふ始末です。全體ほかに代地が見つからなかつたんですか？……おまけに人の話では、あなたは百姓たちから元の大麻畑まで取り上げたさうぢやありませんか？」

「それだつて、耕地整理だから仕方がないぢやありませんか？」とマルダライ・アポローヌイチは答へた。「あの耕地整理は私のこゝんとここに聞へてるんですよ（彼は自分の後ろ頭を指さして見せた）。あの耕地整理といふやつは碌な事はないと思ひますよ。ところで、私があいつ等の大麻畑を取り上げたとか、それからまあ、あすこに生簀を掘つてやらなかつたとか——さういふことは、あなた、自分でちゃんと心得て居りますよ。私はたゞの人間で、萬事、昔風にやりますのでな。私に云はせれば、地主なら地主らしく、百姓なら百姓らしくするが、いゝ、といふわけで……さうですとも。」

これ程はつきりした、否應のない論法にかゝつては、無論、どうにも返事のしやうがない。

「それにまた、」と彼は言葉を續けた。「あの百姓たちはよくない連中で、私の勘氣を受けたわけなんですよ。とりわけ、その中に仕様のないのが二軒ありましてな、まだ先代の頃から——神よ何とぞ天國を興へ給へ——不興を受けてゐたんです。とても不興を受けてゐたので。打ち明けて



申しますが、私はかういふ風に考へてゐる。つまり、親父が泥棒なら、息子も泥棒といふわけなんです。あなたはどう仰つしやるか知れないが……いや、血筋ですよ、この血筋といふ奴は、争へないものでしてな！」

とかくしてゐる間に、あたりはすつかりしんとなつてしまつた。たゞとき／＼風が水のやうに流れて来て、邸の邊りで名残りを惜しむやうに消えて行きながら、既の方で調子正しく頻りに何か叩く音を、私たちの耳まで運んで來るのであつた。マルダライ・アポローヌイチは、茶を入れた受け皿を唇の傍へ持つて行つて、もう小鼻をひろげようとしかけたが——御承知の通り、すべを止るに、耳を傾け、一つうなづいてから茶を啜つた。それから皿を卓の上のせ、さも人の好きささうな微笑を浮かべながら、思はず識らず既の物音に拍子を合はせるやうに、「チュキ、チュキ、チュク！ チュキ、チュク！ チュキ、チュク！」と云ふのであつた。

「あれはなんですか？」と私は驚いて訊ねた。

「なに、あれは私の云ひつけで、いたづら者を折檻してゐるんですよ……食堂番のワーシヤを御存じですか？」

「ワーシヤつて誰のことですか？」

「それ、このあひだ食事の時に給仕をしたあれですよ。こんな大きな頬髯を生やしてゐる。」

どんなに激しい義憤の言葉も、マルダライ・アポローヌイチの晴れやかな、つゞましい眼ざしに會つたら、忽ちその鋒先きを挫かれるだらう。

「どうなすつたんです、あなた、どうなすつた？」と彼は首を捻りながら云ひ出した。「一體わ

たしが悪黨だとも仰つしやるんですか、そんなに私の顔を穴のあくほど御覽になつて？ 愛すればこそ懲らしもする、これはあなただつて御承知でせうに。」

十五分ばかりして、私はマルダライ・アポローヌイチと別れを告げた。馬車で村を通り抜けて行くと、ふと食堂番のワーシヤが眼に入つた。彼は村の通りを胡桃を齧りながら歩いてゐた。私は馭者に馬を止めさして彼を傍へ呼んだ。

「え、どうだ、今日お前はお仕置きを受けたらう？」と私は訊ねた。

「どうしてそれを御存じで？」とワーシヤは答へた。

「旦那が話して聞かせたのさ。」

「旦那が御自分で？」

「どうして旦那はお前に仕置きなんか云ひつけたんだらう？」

「身から出た錆なんで、旦那、身から出た錆なんで。當家ぢやつまらねえ事で仕置きなんかありません。さういふ法は當家にやごせえません。——それこそ決してこちらの旦那はそんな方ぢやありませんよ。こゝの旦那は……あんな旦那は、この縣内どこを探したつて、一人とありやしませんや。」

「さあ、やれ！」と私は馭者に云ひつけた。

『これがさうだ、これが昔ながらの露西亞なんだ！』と私は歸る道すがら、かう考へた。



納本



日記  
上人  
上卷

定價 100 圓

新潮文庫

昭和二十六年十二月廿五日 印刷  
昭和二十六年十二月三十日 發行

譯者 米川正夫

發行者 東京都新宿區矢來町七一  
佐藤義夫

發行所 株式會社 新潮社  
東京都新宿區矢來町七一

電話九段 〇三一五番  
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

東京都新宿區市谷加賀町・大日本印刷株式會社







最新刊 近刊書

てんやわんや 獅子文六作 〇  
 ふらんす物語 永井荷風作 〇  
 あめりか物語 永井荷風作 〇  
 絶壁 井上友一 郎作 〇  
 生まざりしならば 正宗白鳥作 〇  
 林芙美子傑作集 林芙美子作 〇  
 愛と死の書 芹澤光治良作 〇  
 吉野葛・盲目物語 谷崎潤一郎作 〇  
 津 輕 太宰 治作 〇  
 田園の憂鬱 佐藤春夫作 〇  
 舞姫・うたかたの記 森 鷗 外作 〇

暗夜行路(下) 志賀直哉作 〇  
 虞美人 草夏目漱石作 〇  
 花のワルツ 川端康成作 〇  
 日本戯曲集(IVIII) 岩田豊雄編 〇  
 俳諧歳時記・秋 新潮社編 〇  
 蜘蛛 福永武彦作 〇  
 人間の條件(下) 小松ロオ作 〇  
 ガリヴァー旅行記 スウイット作 〇  
 仔鹿物語(上) ロウリンクス作 〇  
 ジャム詩集 堀口大學譯 〇  
 グウルモン詩集 堀口大學譯 〇  
 結婚・友情・幸福 河盛ロ好蔵譯 〇



